

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(83)

— 農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I —  
農業開発総合センター遺跡群 I (第1分冊)

KUBOMINOUE

窪見ノ上遺跡

KUSATO

古里遺跡

TATEISIGAHARA

建石ヶ原遺跡

NISHIHARA

西原遺跡

第2分冊

FUKIAGEKONAKABARU  
吹上小中原遺跡

UMAMEGURI  
馬廻遺跡

SANTANMUTA  
三反牟田遺跡

第3分冊

図 版 編

2005年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



調査前風景（東上空から）



建石ヶ原遺跡空中写真



古里遺跡空中写真



吹上小中原遺跡空中写真



吹上小中原遺跡 4号住居跡土器出土状況



窪見ノ上遺跡出土縄文時代早期土器一括



吹上小中原遺跡土器溜り出土土器一括



吹上小中原遺跡 4 号住居跡内出土土器一括

# 目次

## 巻頭カラー

- 1 調査前風景（東上原から）
- 2 礎石ヶ原遺跡空中写真
- 3 古里遺跡空中写真
- 4 吹上小中原遺跡空中写真
- 5 吹上小中原遺跡4号住居跡十器出土状況
- 6 窪見ノ上遺跡出土縄文時代早期土器一括
- 7 吹上小中原遺跡十器溜り出土土器一括
- 8 吹上小中原遺跡4号住居跡内出土土器一括

## 第1分冊

- 第I章 調査の経過
- 第II章 遺跡の位置と環境
- 第III章 層位
- 第IV章 窪見ノ上遺跡
- 第V章 礎石ヶ原遺跡
- 第VI章 古里遺跡・西原遺跡

## 第2分冊

- 第VII章 吹上小中原遺跡
- 第VIII章 馬廻遺跡
- 第IX章 三反幸田遺跡

## 第3分冊

図版編

## 第1分冊目次

序文

報告書抄録

例言

第I章 調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経過	1
第2節 調査の組織	1
第3節 調査の経過	4
第II章 遺跡の位置と環境	7
第1節 遺跡の位置	7
第2節 周辺遺跡	8
1 吹上町	8
2 金峰町	8
第III章 層位	11
第IV章 窪見ノ上遺跡	12
第1節 調査概要	12
1 遺跡の立地及び調査概要	12
2 遺跡の層序	14
第2節 発掘調査の成果	16
1 旧石器時代の調査	16
2 縄文時代早期の調査	16
(1) 遺構	16
(2) 遺物	16
3 縄文時代前・中・後期の調査	112
(1) 遺構	112
(2) 遺物	112
4 中・近世の調査	115
(1) 遺構	115
(2) 遺物	115
第3節 小結	116
第V章 礎石ヶ原遺跡	120
第1節 調査概要	120
1 遺跡の立地及び調査概要	120
2 遺跡の層序	120
第2節 発掘調査の成果	123
1 旧石器時代（Ⅱ-Ⅲ層）の調査	123

(1) 遺構	123
(2) 遺物	124
2 縄文時代早期(V~IV層)の調査	128
(1) 遺構	128
(2) 遺物	131
3 縄文時代前期~晩期(III~II層)の調査	143
(1) 遺構	143
(2) III~II層の遺物	143
4 弥生時代~古代(III~表層)の調査	160
(1) 遺構	160
(2) 弥生時代の遺物	160
(3) 古墳時代の遺物	161
(4) 古代の遺物	161
5 中世(II層~表層)の調査	163
(1) 遺構	163
(2) 遺物	169
第3節 小結	169
付編 科学分析結果報告	175
第Ⅳ章 古里・西原遺跡	181
第1節 古里遺跡	181
1 遺跡の立地及び調査概要	181
2 遺跡の層序	181
3 発掘調査の成果	185
(1) 縄文時代の調査	185
① 調査の概要	185
② 遺物	185
(2) 古墳時代の調査	191
遺物	191
(3) 中世の調査	192
① 調査の概要	192
② 遺構	192
③ 遺物	205
第2節 西原遺跡	210
1 遺跡の立地	210
2 調査の概要	210
第3節 小結	210

## 挿図目次

第1図 農業研究総合センター内遺跡群I図	7
第2図 周辺地形図(吹上町・金峰町)	10
第3図 模式柱状図	11

## 窪見ノ上遺跡

第1図 窪見ノ上遺跡位置図(1/25,000)	12
第2図 周辺地形図及びグリッド図	13
第3図 土層断面図1	14
第4図 土層断面図2	15
第5図 V層遺構配置図	17
第6図 集石遺構1	18
第7図 集石遺構2	19
第8図 集石遺構3	20
第9図 集石遺構4	21
第10図 集積遺構内出土遺物1	22
第11図 集積遺構内出土遺物2	23
第12図 V層遺物出土状況	24
第13図 I類土器・II類土器分布状況	25
第14図 I類土器1	27
第15図 I類土器2	28
第16図 I類土器3	29
第17図 I類土器4	30
第18図 I類土器5	31
第19図 I類土器6	32
第20図 I類土器7	33
第21図 I類土器8	34
第22図 I類土器9	35
第23図 I類土器10	36
第24図 I類土器11	37
第25図 I類土器12	38
第26図 I類土器13	39
第27図 I類土器14	40
第28図 I類土器15	41
第29図 I類土器16	42
第30図 I類土器17	43
第31図 I類土器18	44
第32図 I類土器19	45
第33図 I類土器20	46
第34図 II類土器1	50
第35図 II類土器2	52
第36図 III類土器1	53
第37図 III類土器2	54
第38図 III類土器3	55

第39図	Ⅲ類土器4	56
第40図	Ⅲ類土器5	57
第41図	Ⅲ類土器6	58
第42図	Ⅲ類土器7	59
第43図	Ⅳ類土器1	61
第44図	Ⅳ類土器2	62
第45図	V類土器1	63
第46図	V類土器2	64
第47図	V類土器3	65
第48図	V類土器4	66
第49図	Ⅵ類土器	68
第50図	Ⅵ類土器1	70
第51図	Ⅵ類土器2	71
第52図	Ⅵ類土器3	72
第53図	Ⅶ・Ⅷ類土器	73
第54図	縄文時代早期出土石器1	75
第55図	縄文時代早期出土石器2	76
第56図	縄文時代早期出土石器3	77
第57図	石鏃の分類図	78
第58図	石鏃分析・分布図	79
第59図	縄文時代早期出土石器4	80
第60図	縄文時代早期出土石器5	81
第61図	縄文時代早期出土石器6	82
第62図	縄文時代早期出土石器7	83
第63図	縄文時代早期出土石器8	85
第64図	縄文時代早期出土石器9	87
第65図	縄文時代早期出土石器10	88
第66図	縄文時代早期出土石器11	89
第67図	縄文時代早期出土石器12	90
第68図	縄文時代早期出土石器13	91
第69図	縄文時代早期出土石器14	92
第70図	縄文時代早期出土石器15	94
第71図	縄文時代早期出土石器16	95
第72図	縄文時代早期出土石器17	96
第73図	縄文時代早期出土石器18	97
第74図	縄文時代早期出土石器19	98
第75図	縄文時代早期出土石器20	99
第76図	縄文時代早期出土石器21	100
第77図	縄文時代早期出土石器22	101
第78図	縄文時代早期出土石器23	102
第79図	縄文時代早期出土石器24	103
第80図	縄文時代早期出土石器25	104
第81図	縄文時代早期出土石器26	105
第82図	縄文時代早期出土石器27	106
第83図	縄文時代早期出土石器28	107

第84図	縄文時代早期出土石器29	108
第85図	縄文時代早期出土石器30	109
第86図	Ⅸ類土器	111
第87図	X類・XI類土器	112
第88図	Ⅱ・Ⅲ層出土石鏃	113
第89図	Ⅲ層出土石器	114
第90図	古道遺構	115
第91図	中世・近世遺構配置図	115

## 建石ヶ原遺跡

第1図	建石ヶ原遺跡位置図(1/25,000)	120
第2図	周辺地形図及びグリッド図	121
第3図	遺跡上層断面図	122
第4図	土坑	123
第5図	Ⅶ層遺構配置図	123
第6図	Ⅶ層遺物出土状況	125
第7図	旧石器実測図1	126
第8図	旧石器実測図2	127
第9図	縄文早期土坑	128
第10図	縄文時代早期遺構配置図	128
第11図	縄文時代遺物出土状況	129
第12図	I類土器	132
第13図	II類土器	133
第14図	III類土器1	134
第15図	III類土器2・IV類土器	135
第16図	V類土器	136
第17図	Ⅵ類土器	137
第18図	Ⅶ類土器	138
第19図	縄文時代早期出土石器1	140
第20図	縄文時代早期出土石器2	141
第21図	縄文晩期遺構(溝状遺構)	144
第22図	Ⅷ類土器1	146
第23図	Ⅷ類土器2	147
第24図	Ⅸ類土器	148
第25図	X類土器	149
第26図	XI類土器	150
第27図	XII・XIII類土器	151
第28図	XIV類土器	152
第29図	XV類土器	153
第30図	縄文前期～晩期出土石器1	156
第31図	縄文前期～晩期出土石器2	157
第32図	縄文前期～晩期出土石器3	158
第33図	縄文前期～晩期出土石器4	159
第34図	古墳時代遺構配置図	160
第35図	古墳時代住居	161



第36回	弥生～古墳時代土器及び古代の須恵器	162
第37回	弥生時代土器	162
第38回	中世溝状遺構 1	164
第39回	中世溝状遺構 2	165
第40回	中世溝状遺構 3	166
第41回	中世溝状遺構 4	167
第42回	中世溝状遺構 5～9	168
第43回	中世溝状遺構 10	169
第44回	中世溝状遺構 11	170
第45回	中世溝状遺構 12	171
第46回	中世方形周溝(墓)及び遺構内出土遺物	172
第47回	集石遺構	173
第48回	中世集石遺構配置図	173
第49回	中世白磁・青磁	174
	付図 1 縄文晩期遺構及び遺物出土状況	
	付図 2 中世遺構配置図	

## 古里・西原遺跡

第 1 回	古里・西原遺跡位置図(1/25,000)	181
第 2 回	周辺地形図及びグリッド図	182
第 3 回	土層断面図	183
第 4 回	古里遺跡全遺物出土状況図	184
第 5 回	縄文時代遺物出土状況(掲載分)	186
第 6 回	縄文時代早期・前期出土土器	187
第 7 回	縄文時代晩期出土土器	188
第 8 回	縄文時代出土土器 1(石鎌・石核)	189
第 9 回	縄文時代出土土器 2(砥石・打製石斧)	189
第10回	古墳時代出土土器	191
第11回	古墳時代遺物出土状況(掲載分)	191
第12回	中世遺構配置図	193
第13回	中世遺物出土状況(掲載分)	194
第14回	1号獨立柱建物跡	195
第15回	3号獨立柱建物跡	196
第16回	4号獨立柱建物跡	197
第17回	5号獨立柱建物跡	198
第18回	6号獨立柱建物跡	199
第19回	9号獨立柱建物跡	200
第20回	10号獨立柱建物跡	201
第21回	12号獨立柱建物跡	202
第22回	溝状遺構及び断面図	204
第23回	中世出土遺物 1	206
第24回	中世出土遺物 2	207
第25回	中世出土遺物 3	208
第26回	中世出土遺物 4	209

第 2 分冊 小中原遺跡・馬廻遺跡・三反半田遺跡

第 3 分冊 図版

## 第 2 分冊目次

第Ⅷ章	次上小中原遺跡	1
第 1 節	調査概要	1
1	遺跡の立地及び調査概要	1
2	遺跡の順序	1
第 2 節	発掘調査の成果	6
1	旧石器時代の調査	6
(1)	遺構	6
(2)	遺物	6
2	縄文時代草創期の調査	8
3	縄文時代早期の調査	14
4	縄文時代前期の調査	40
5	縄文時代後期の調査	52
6	縄文時代晩期の調査	55
7	弥生時代の調査	77
(1)	遺構	77
(2)	遺物	77
8	古墳時代の調査	82
(1)	遺構	82
(2)	遺物	123
9	古代の調査	138
(1)	遺構	138
(2)	遺物	138
10	中世の調査	139
(1)	遺構	139
第 3 節	小 結	150
第Ⅷ章	馬廻遺跡	152
第 1 節	調査概要	152
1	遺跡の立地及び調査概要	152
第 2 節	発掘調査の成果	152
第 3 節	小 結	153
第Ⅷ章	三反半田遺跡	159
第 1 節	調査概要	159
1	遺跡の立地及び調査概要	159
第 2 節	発掘調査の成果	159
第 3 節	小 結	159

※ 2 分冊挿入目次及び 3 分冊の図版目次は、各分冊に記載。

## 序 文

鹿児島県は、「鹿児島県総合基本計画」に基づく戦略プロジェクト「食の創造拠点鹿児島島の形成」の一環として鹿児島県農業開発総合センターを建設することとしました。鹿児島県立埋蔵文化財センターは、建設事業に先立って、平成8年から8年間にわたって埋蔵文化財の発掘調査を実施しました。

この報告書は農業開発総合センター建設予定地内に存在する24遺跡の内、吹上町に所在する7遺跡の発掘調査の記録です。

この調査によって、旧石器時代から中世までの各時代の遺構・遺物が発見されています。窪見ノ上遺跡では、縄文時代早期前葉の良好な資料と石斧製作の痕跡ではないかと思われる資料が出土しています。吹上小中原遺跡では、縄文時代早期の石槍が3本まとまって出土する石斧埋納遺構や、古墳時代の集落跡から畿内系初期須恵器が出土するなど貴重な情報が得られています。また、建石ヶ原遺跡では、縄文時代晩期の道の跡と思われる遺構や中世の方形周溝墓が発見され、古里遺跡では、中世の集落（掘立柱建物跡12棟）と溝状遺構が発見されています。

この調査の成果が地域の歴史研究や埋蔵文化財の啓発普及の一助になれば幸いです。

最後に、調査に御協力をいただいた県農政部農業開発総合センター整備事務局をはじめ、金峰町・吹上町の関係部局、そして発掘調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所長 木原 俊 孝

# 報告書抄録

ふりがな	のうぎょうかいはつそうごうせんたー-いせきぐん くぼみのうえいせきほか							
書名	農業開発総合センター遺跡群Ⅰ(窪見ノ上遺跡外)							
副書名	農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅰ							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	83							
編者名	中村耕治・岩屋高広・廣 栄次・松下建生・川元慎久							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-1461 鹿児島県国分市上之段1175-1 Ⅱ0995-48-5811							
発行年月日	2005年3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査起因
		市町村	遺跡番号					
窪見ノ上	鹿児島県	46367	34-84-0	31°29'13"	130°20'30"	2003-2003	35.490	農業開発総合センター建設
雄石ヶ原	吹上町		34-120	31°28'43"	130°21'06"	1999-2000	19.000	
内里			34-119	31°28'43"	130°21'03"	1999-2000	15.160	
西原			34-104-0	31°28'43"	130°21'00"	2000		
吹上小中原			34-105-0	31°29'03"	130°21'09"	2000-2001	28.000	
馬廻			34-107-0	31°29'01"	130°20'34"	2001	31.930	
三反牟田			34-106-0	31°29'09"	130°20'41"	1999	31.960	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				特記事項
窪見ノ上		旧石器時代 縄文時代 (早期)	集石・集積7基	剥片				
		(前期) (中期) (後期)		石鏃・石槍・石斧・スクレイパー・磨石・石鏃・岩手式土器・前半式土器・石版式土器・下割草式土器・桑ノ丸式土器・中厚式土器・柳型文土器				
雄石ヶ原		旧石器時代 縄文時代 (早期) (中期) (後期) (晩期)	土坑・ブロック5基	竪穴式土器 釜口式土器 折柄式土器 マイクロブレイド・三稜尖頭器				
		古墳 中世	講状遺構 竪穴住居跡1基 方形竪溝溝溝 礫化面・溝	土器・石鏃 前半式土器・石版式土器・桑ノ丸目型土器 折柄式土器 人住式土器				
古里		縄文時代 (晩期)	中世	土師器・須恵器・陶磁器・滑石製石鏡				
西原		縄文時代	講状遺構					
吹上小中原		旧石器時代 縄文時代 (早期) (中期) (晩期) 弥生時代 古墳時代	落し穴 集石・石鏃製作跡 土坑埋納遺構・集石	磨石片・細石核・剥片 土器・石鏃・叩き石 前半式土器・青田式土器・石版式土器 桑ノ丸目型土器 人住式土器・石斧・石鏃 高橋式土器・山之1式土器・松木桶式土器 初期須恵器・成川式土器・鉄斧・磨石				
馬廻		古代 中世		土師器・須恵器 陶磁器				
三反牟田		縄文時代 (早期) 縄文時代 (後期)	竪立柱建物跡9棟	石版式土器・桑ノ丸式土器				
			石鏃製作跡?	石鏃				



農業開発センター遺跡群位置図 (1/5,000)

## 例 言

- 1 本報告書は、鹿児島県農業開発総合センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成8年度・9年度に確認調査、平成10年度から平成15年度までの間、鹿児島県農政部農業開発総合センター整備事務局の依頼を受けて、鹿児島県教育委員会鹿児島県県立埋蔵文化財センターが調査主体となって実施した。
- 3 報告書作成事業は、平成15年度は発掘調査と併行して実施し、平成16年度は整理作業だけを実施した。
- 4 農業開発総合センター建設に伴う発掘調査対象遺跡は、吹上町・金峰町に24遺跡が存在しているが、本年度は、吹上町に所在する7遺跡について報告することとした。
- 5 挿図番号・表番号・遺物番号については、各遺跡毎の通し番号とした。また、本文・挿図・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図毎に示している。
- 7 報告書中のレベル数値はすべて海拔絶対高である。
- 8 遺跡における遺構等の実測は発掘担当者が行なったが、一部は実測委託も行なった。
- 9 遺物復元・実測・製図等の整理作業は鹿児島県県立埋蔵文化財センター整理作業員が携わった。また、一部の石器の実測・製図については、実測委託をした。
- 10 本報告書の編集は、中村耕治・岩屋高広・廣 栄次・松下建生・川元禎久が行い、遺物・遺構の実測・製図は遺跡を分担してそれぞれで実施した。執筆分担は以下のとおりである。また、写真撮影については横手浩二郎・西園勝彦の協力を得た。

第I章 発掘調査の経過	中村 耕治
第II章 遺跡の位置と環境	中村 耕治
第III章 層位	中村 耕治
第IV章 窪見ノ上遺跡	岩屋 高広・廣 栄次
第V章 建石ヶ原遺跡	川元 禎久
第VI章 古里遺跡・西原遺跡	松下 建生
第VII章 吹上小中原遺跡	中村 耕治
第VIII章—3節—5 (中世)	松下 建生
第IX章 小中原遺跡の石器	立神 次郎
第X章 馬廻遺跡	中村 耕治
第XI章 三反牟田遺跡	中村 耕治

- 11 吹上小中原遺跡は金峰町所在の小中原遺跡と区別するために所在地の吹上町の吹上を付して遺跡名とした。ただし本文中では小中原遺跡として記述した部分が多くある。
- 12 遺物は鹿児島県県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用する計画である。

## 第I章 調査の経過

### 第1節 調査に至るまでの経過

農農政部農業開発総合センター整備事務局（以下農開総センター整備事務局）は、「鹿児島県総合基本計画」（平成6年）に基づく戦略プロジェクト「食の創造拠点鹿児島島の形成」の一環として、鹿児島県農業開発総合センター建設事業を日置郡吹上町・金峰町地区（吹上町大字入米・中之里・湯之浦・和田及び金峰町大字大野・代表地番日置郡金峰町大野諏訪前2935-1番地）内において計画した。このため農開総センター整備事務局は、本事業に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について県教育庁文化課（平成8年から文化財課以下文化財課）に照会を行なった。これを受けた文化財課は平成6年11月に分布調査を実施した。その結果、事業区域内の対象面積1,347,900㎡に10遺跡が存在することが判明した。

分布調査の結果を受けて、農農政部・文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）の三者で協議した結果、対象地内の遺跡の範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとし、調査は埋文センターが担当することとした。

確認調査は、平成8年度・9年度に実施した。確認調査の結果、24遺跡（約10,000㎡）が存在することが明らかになり、建築物予定地及び面積整備により削除される部分等について記録保存のための本調査を実施することとなった。

### 第2節 調査の組織

平成8年度

事業主体	鹿児島県農業開発総合センター整備事務局
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 古元 正幸
調査企画	〃 次長兼総務課長 尾崎 進 〃 主任文化財主事兼調査課長 戸崎 勝洋 〃 調査課長補佐 新東 晃一 〃 主任文化財主事兼第二調査係長 立神 次郎

調査担当	〃 文化財主事 脇岡 隆夫 〃 文化財研究員 有馬 孝一 〃 文化財研究員 横口 勝嗣
事務担当	〃 主事 前屋敷裕徳 〃 主事 追立ひとみ

平成9年度

事業主体	鹿児島県農業開発総合センター整備事務局
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 古元 正幸
調査企画	〃 次長兼総務課長 尾崎 進 〃 主任文化財主事兼調査課長 戸崎 勝洋 〃 調査課長補佐 新東 晃一 〃 主任文化財主事兼第二調査係長 立神 次郎
調査担当	〃 文化財主事 東 和幸 〃 文化財研究員 山崎 克之
事務担当	〃 主事 前屋敷裕徳 〃 主事 追立ひとみ

調査指導

H.9.12.5	鹿児島県考古学会長 河口 貞徳
H.10.1.26	鹿児島短期大学学長 三木 靖
H.10.1.29	鹿児島大学法文学部教授 上村 俊雄
H.10.2.17	鹿児島大学工学部教授 土田 充義

平成10年度

事業主体	鹿児島県農業開発総合センター整備事務局
調査主体	鹿児島県教育委員会
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター 所長 吉永 和人
調査企画	〃 次長兼総務課長 尾崎 進 〃 主任文化財主事兼調査課長 戸崎 勝洋 〃 調査課長補佐兼第一調査係長 新東 晃一
調査担当	〃 文化財主事 中村 耕治 〃 文化財主事 藤崎 光洋 〃 文化財主事 東 和幸
事務担当	〃 主査 前屋敷裕徳 〃 主査 政倉 孝弘

	〃 主事 沼池 佳子				青崎 和憲
調査指導	鹿兒島県考古学会会長 河口 貞徳		〃 主任文化財主事 中村 耕治		〃 主任文化財主事 中村 耕治
	鹿兒島大学法文学部教授 上村 俊雄	調査担当	〃 主任文化財主事 中村 耕治		〃 文化財主事 西郷 吉郎
	鹿兒島大学法文学部助教授 本田 道輝		〃 文化財主事 山崎 省一		〃 文化財研究員 横手浩二郎
	鹿兒島経済大学 中村 明敏		〃 文化財調査員 西 谷恵子		
	国立歴史民俗博物館助教授 股栗 博巳				
	鹿兒島県立博物館学芸主事 成尾 英仁	事務担当	〃 総務係長 有村 貢		
平成11年度			〃 主事 沼池 佳子		
事業主体	鹿兒島県農業開発総合センター整備 事務局	調査指導			
調査主体	鹿兒島県教育委員会	H.13.3.5	鹿兒島大学法文学部教授 上村 俊雄		
調査総括	鹿兒島県立埋蔵文化財センター	H.13.1.23	鹿兒島大学法文学部助教授 本田 道輝		
	所長 古永 和人	H.13.3.14～15	東海大学文学部教授 織笠 昭		
調査企画	〃 次長兼総務課長 黒木 友幸	H.13.1.17	鹿兒島女子短期大学講師 大西 智和		
	〃 主任文化財主事兼調査課長	平成13年度			
	戸崎 勝洋	事業主体	鹿兒島県農業開発総合センター整備 事務局		
	〃 調査課長補佐兼第一調査係長	調査主体	鹿兒島県教育委員会		
調査担当	〃 主任文化財主事 中村 耕治	調査総括	鹿兒島県立埋蔵文化財センター		
	〃 文化財主事 寺師 孝則		所長 井上 明文		
	〃 文化財主事 藤崎 光洋	調査企画	〃 次長兼総務課長 黒木 友幸		
	〃 文化財研究員 山崎 省一		〃 主任文化財主事兼調査課長		
	〃 文化財研究員 横手浩二郎		新東 晃一		
事務担当	〃 総務係長 有村 貢		〃 調査課長補佐 立神 次郎		
	〃 主事 沼池 佳子		〃 主任文化財主事兼第一調査係長		
調査指導			青崎 和憲		
H.10.10.17	鹿兒島大学工学部教授 土田 充義	調査担当	〃 主任文化財主事 中村 耕治		
H.10.11.17	鹿兒島大学法文学部教授 上村 俊雄		〃 主任文化財主事 中村 耕治		
H.10.11.24	鹿兒島大学法文学部助教授 本田 道輝		〃 文化財主事 寺師 孝則		
H.12.11.8～9	ラ・サール学園教諭 永山 修一		〃 文化財主事 湯之前 尚		
	熊本県城南町教育委員会 清口 純一		〃 文化財主事 西郷 吉郎		
平成12年度			〃 文化財主事 高見 憲次		
事業主体	鹿兒島県農業開発総合センター整備 事務局		〃 文化財調査員 栗山 菜子		
調査主体	鹿兒島県教育委員会		〃 文化財調査員 森田 裕之		
調査総括	鹿兒島県立埋蔵文化財センター	事務担当	〃 文化財調査員 坂元 恒大		
	所長 井上 明文		〃 総務係長 前口 昭信		
調査企画	〃 次長兼総務課長 黒木 友幸	調査指導			
	〃 主任文化財主事兼調査課長	H.14.1.16	鹿兒島大学名誉教授 五味 克夫		
	新東 晃一	H.13.10.11～12	福岡大学人文学部教授		
	〃 調査課長補佐 立神 次郎		小田富上大		
	〃 主任文化財主事兼第一調査係長				

H.14.1.17~18	大谷女子大学文学部教授	中村 浩	調査担当	〃	文化財主事	湯之前 尚
H.13.10.4	鹿児島大学法文学部助教授	本田 道輝		〃	文化財主事	日高 正人
平成14年度				〃	文化財主事	森 雄二
事業主体	鹿児島県農業開発総合センター整備			〃	文化財主事	岩戸 孝夫
事務局				〃	文化財研究員	廣 栄次
調査主体	鹿児島県教育委員会		整理担当	〃	主任文化財主事	中村 耕治
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		事務担当	〃	総務係長	平野 浩二
		所長 井上 明文		〃	主事	池 珠美
調査企画	〃	次長兼総務課長 田中 文雄	調査指導			
	〃	調査課長 新東 晃一	H.16.11.18	鹿児島大学法文学部助教授	本田 道輝	
	〃	調査課長補佐 立神 次郎	H.16.1.28	鹿児島大学助教授	中村 直子	
	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	H.16.2.12~13	別府大学文学部教授	橋 昌信	
		池畑 耕一	平成16年度（整理作業）			
	〃	主任文化財主事 中村 耕治	事業主体	鹿児島県農業開発総合センター整備		
調査担当	〃	主任文化財主事 中村 耕治	事務局			
	〃	文化財主事 湯之前 尚	企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
	〃	文化財主事 西部 吉郎	作成責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
	〃	文化財主事 富山 孝一		所長 木原 俊孝		
	〃	文化財主事 森 雄二	作成企画	〃	次長兼総務課長 賞雅 彰	
	〃	文化財研究員 桑波田武志	〃	〃	調査課長 新東 晃一	
	〃	文化財調査員 坂本佳代子	〃	〃	調査課長補佐 立神 次郎	
事務担当	〃	総務係長 前田 昭信	〃	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	
	〃	主事 池 珠美	〃	〃	主任文化財主事 中村 耕治	
調査指導			〃	〃	調査課長補佐 立神 次郎	
H.14.12.16~17	立命館大学文学部教授	矢野 健一	作成担当	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	
H.14.11.7	鹿児島大学教育学部教授	森脇 広		〃	主任文化財主事 中村 耕治	
H.14.8.8	鹿児島大学法文学部助教授	本田 道輝		〃	文化財主事 岩根 高広	
H.12.12~13	熊本大学 助教授	小畑 弘己		〃	文化財主事 廣 栄次	
平成15年度（整理作業）				〃	文化財主事 松下 健生	
事業主体	鹿児島県農業開発総合センター整備			〃	文化財研究員 川元 浩久	
事務局				〃	主任文化財主事 平野 浩二	
調査主体	鹿児島県教育委員会		事務担当	〃	総務係長	
調査総括	鹿児島県立埋蔵文化財センター			〃	主事 竹ノ内有理	
		所長 木原 俊孝	報告書作成検討委員会	H.16.12.27	所長他9名	
調査企画	〃	次長兼総務課長 田中 文雄	報告書作成指導委員会	H.16.12.21	調査課長他8名	
	〃	調査課長 新東 晃一	企画担当	東 和幸・横手浩二郎		
	〃	調査課長補佐 立神 次郎	指導者・協力者			
	〃	主任文化財主事兼第一調査係長	H.17.2.21	鹿児島大学法文学部助教授	本田 道輝	
		池畑 耕一	H.17.2.13	鹿児島大学助教授	橋本 達也	
	〃	主任文化財主事 中村 耕治				



### 第3節 調査の経過

平成6年の分布調査の結果に基づいて平成8年度から確認調査を始め平成9年度からは本調査を開始した。

平成8年度は、平成8年10月21日より平成9年3月24日までの約6か月間実施した。主に農業大学校建設予定地に係る西原遺跡・古里遺跡・建石ヶ原遺跡・諏訪前遺跡・諏訪半田遺跡と調整池造成工事に係る宗田堀遺跡・頭無遺跡・頭無泊田遺跡、耕種試験場の管理・研究棟建設予定地の馬塚松遺跡・諏訪半田遺跡・諏訪協遺跡に関して31箇所のトレンチを設定して確認調査を行なった。その結果、旧石器時代、縄文時代早期・中期・前期・後期、古代の遺物や遺構が認められた。ただ、昭和30年代に大規模な圃場整備事業が行なわれ、上層部の遺物包含層が削除されている部分があることも確認された。

平成9年度は、平成9年6月23日より平成10年3月27日までの10か月間実施した。平成8年度の確認調査の補完で買収の済んでいる畑地を対象に150箇所のトレンチ調査及び耕種試験場本館・研究棟建設予定地の馬塚松遺跡、農業大学校予定地の諏訪半田遺跡、耕種試験場畑地予定地の人門口遺跡について一部本調査を実施した。確認調査の結果、広範囲に遺跡が広がる事が判明した。また、馬塚松遺跡では中世～近世の掘立柱建物跡や道の跡が検出され、諏訪半田遺跡では古代の溝状遺構・掘立柱建物跡が検出された。

平成10年度は、農業大学校の予定地を中心に平成10年4月24日から平成11年3月26日までの11か月間実施した。諏訪前遺跡は研修棟及び削平される圃場部分、建石ヶ原遺跡は学生寮及び削平される圃場部分、古里遺跡は講堂等関連施設の本調査である。

また、それまでに用地買収が未了であった尾ヶ原遺跡・三反半田遺跡・窪見ノ上遺跡について確認調査を実施した。諏訪前遺跡では、縄文時代早期の築石遺構が検出され、縄文時代晩期の埋設土器・柱列・掘立柱建物跡（1間×1間）・上坑等の遺構が検出され、おびただしい土器や石器に混ざって緑色の石で作られた玉類（丸玉・管玉・勾玉）も出土している。また、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての竪穴住居3基も検出されている。1号住居からは竜（ドラゴン）を模した土器片も出土している。建石ヶ原遺跡では、旧石器時代、縄文時代早期・中期・前期・後期・晩期、

弥生時代、古墳時代、中世等各時期の遺物が出土している。遺構としては、縄文晩期で道の跡ではないかと思われる浅い溝1条、古墳時代で竪穴住居1基、中世で方形周溝墓1基等が検出されている。確認調査を実施した尾ヶ原遺跡・窪見ノ上遺跡・三反半田遺跡についても遺物の出土が見られ遺跡の存在が確認された。

平成11年度は、農業大学校予定地及び掘削部分の本調査を平成11年4月20日から平成12年3月24日までの11か月間実施した。諏訪前遺跡は研修棟の建設予定地である。10年度と同様縄文時代早期・晩期が中心であるが縄文時代中期・後期の遺物も見られた。諏訪前遺跡の調査については11年度で終了した。諏訪半田遺跡は研修棟・圃場・幹線道路部分の調査である。縄文時代早期・中期・晩期、弥生時代終末から古墳時代初頭の磁器、古代、中世の各時期の遺構遺物が出土している。縄文時代早期期では磁器が検出され、早期では築石遺構6基も検出されている。晩期では、深鉢を埋めた埋設土器が3基、柱列11基が検出され、玉類も出土している。古墳時代の竪穴住居跡は2基検出され、諏訪前遺跡の住居と同時期と思われる。古代および中世では、溝状遺構・掘立柱建物跡が検出されている。遺物では「王」もしくは「玉」の字が書かれた青磁も出土している。建石ヶ原遺跡は幹線道路が国道270号線と交差する取付部の調査である。縄文時代早期・晩期の遺物が出土するが、ここでは、旧石器時代の遺物が主で、マイクロブレイド・チップ・フレイク・三稜尖頭器が出土している。古里遺跡は教育管理棟・食堂・体育館・武道館等の建設予定地の調査である。縄文時代晩期の遺物が出土しているが量は少ない。中世では、掘立柱建物跡12棟が検出され陶磁器も出土している。西原遺跡は幹線道路部分の確認調査である。トレンチ3か所を設定し2か所から縄文時代の遺物が出たが遺物包含層に影響がないことと遺物が少ないため本調査は実施しなかった。小中原遺跡は農業大学校の果樹試験場のための調査である。一部縄文時代早期の遺物が出したが、古墳時代・中世が主である。また、北側の白地先端部については削平されるため下層確認を実施したが、旧石器・縄文時代早期の遺物が確認された。古墳時代では竪穴住居跡3基と上坑2基が検出され、中世では掘立柱建物跡2棟、溝状遺構1条が検出された。頭無泊田遺跡は1号調整池に伴い削平が予定されるための調査である。縄文時代早期の遺

物が多く、集石遺構5基も検出された。

平成12年度は農業大学校の果樹園・飼料畑と耕種試験場の畑地による削平部分、幹線道路（削平）部分を中心に平成12年4月24日から平成13年3月27日までの11か月間実施した。吹上小中原遺跡は昨年引き続きであるが、旧石器時代の遺物や落し穴・縄文時代草創期の集石遺構・石器製作跡、縄文早期の石棺埋納遺構など古い時代の調査が特筆される。また、昨年引き続き古墳時代の竪穴住居跡や中世の竪立柱建物跡が検出され、竪穴住居7基、竪立柱建物跡9棟が検出された。4号竪穴住居跡からは在地の成川式土器と共に初期須恵器が出土し、成川式土器の編年の指標となるものと思われる。大門口は耕種試験場の研究茶園部分で削平を受ける部分を調査し、下層については随時トレンチを設けて確認した。縄文時代晩期が主であり、柱穴列24基、竪立柱建物跡（1間×1間）10棟、土坑5基が検出された。中世から現代までの遺構・遺物も見られるが、双魚文の描かれた中世の青磁、近世の溝状遺構、今も残っている諏訪神社の参道へ向かっている昭和30年代までの道などが特筆される。また、年度末に縄文時代の珧状耳環も出土している。

諏訪脇遺跡は幹線道路部分の調査である。縄文時代早期から晩期までの遺構・遺物が出土している。宗田堀遺跡も幹線道路部分の調査である。縄文時代晩期の柱穴列3基と遺物が検出されている。また、一部に旧石器時代の包層が確認され、調査の結果ナイフ形石器の行器製作跡の可能性が高いものである。馬塚遺跡は農業大学校の研究畑部分の調査である。調査予定地域は基盤の岩盤が露出するなど遺物包含層の残存する部分は少なかったが、縄文時代早期の良好な資料が得られた。市堀遺跡・頭無迫田遺跡は隣接する遺跡である。いずれも耕種試験場の研究畑部分である。縄文時代晩期の柱穴列・竪立柱建物跡（1間×1間）、中世の竪立柱建物跡・竪穴遺構などが検出されている。尾ヶ原遺跡はこれまで杉林・雑木林のため確認調査が出来なかった範囲についての確認調査を実施した。トレンチを14か所設定したが、ほとんどのトレンチより旧石器時代から縄文時代・古墳時代・古代の遺物が出土し、ほぼ全面に遺跡が広がることが判明した。

平成13年度は、農業大学校関連および耕種試験場関連の削平部分を中心に平成13年5月7日から平成14年3月26日まで実施した。馬塚松遺跡は耕種試験場の本

館建設予定地で、縄文時代早期・晩期、弥生時代前期の竪立柱建物跡（2間×2間）、中世の竪立柱建物跡15棟・溝状遺構等が検出されている。大門口遺跡は研究茶園の予定地で、前年度に引き続いて調査したものである。縄文時代早期・晩期が出土している。尾ヶ原遺跡は農業大学校の飼料畑予定地である。縄文時代早期の集石遺構、晩期の集石遺構、弥生時代中期の小児用合口甕棺、古墳時代の竪穴住居跡8基など豊富な資料が得られた。神原遺跡は支線道路で削平される部分の調査である。遺物は縄文早期・晩期が少量出土したただけであったが、古代の溝状遺構が検出され、溝の中からは須恵器・土師器がまとも出土している。小中原遺跡は、整地作業終了後に設計変更があり急遽調査したものである。旧石器、縄文時代早期の遺物が出土している。諏訪脇遺跡・宗田堀遺跡は道路拡張に伴う調査である。縄文時代晩期の遺物が出土している。諏訪半田遺跡は、耕種試験場の本館及び付帯施設建設予定地で、縄文時代早期・晩期（柱穴列）、中世（竪立柱建物跡）の遺構・遺物が出土している。中尾遺跡は圃場整備で削平される部分の調査である。縄文時代草創期・早期・晩期の遺物が出土しているが、草創期では降帯文土器に伴って、集石遺構5基、落し穴4基、竪穴十坑13基など注目される遺構が多く検出された。南原内堀遺跡も圃場整備で削平される部分の調査である。縄文時代草創期・早期の遺物が出土している。平成14年度は、耕種試験場関連の削平部分を中心に平成14年5月7日から平成15年3月20日まで実施した。桜谷遺跡は研究水田予定地で、旧石器時代のブロック1基、縄文時代草創期のブロック1基、早期の集石遺構35基、石器製作跡1基、晩期の土坑3基、弥生時代中期の竪穴住居跡1基などが検出された。荒田遺跡も研究水田予定地で、旧石器時代（ナイフ形石器文化期のブロック1基、細石器文化期のブロック2基）、縄文時代草創期のブロック1基、早期の集石遺構32基が検出されている。馬塚松遺跡は主作道建設部分の調査で、縄文時代早期・晩期の遺物が出土している。神原遺跡は病中付帯施設建設予定地の調査で、旧石器時代の礫群9基、縄文時代草創期の礫群4基、晩期の竪立柱建物跡（1間×1間）3棟、柱穴列2基、土坑2基、中世の古道1条等が検出されている。諏訪脇遺跡は研究畑予定地で、縄文時代早期の遺物、晩期の竪立柱建物跡8棟・柱穴列14基、古代から中世の溝

状遺構12条、掘立柱建物跡10棟、竪穴遺構2基が検出されている。宗川堀遺跡は園芸花き畑予定地で、旧石器時代（ナイフ形石器文化期のブロック3基・磯群・細石器文化期のブロック1基・磯群）、縄文時代早期の集石遺構、晩期の土器集土域などが検出されている。

平成15年度は農業大学校・耕種試験場の畑地で削平部分を中心に平成15年5月6日から平成16年2月8日まで実施した。窪見ノ上遺跡では縄文時代早期前半の良好な資料と、石斧製作の痕跡ではないかと思われる資料が得られた。南原内堀遺跡では農業開発総合センター遺跡群では数少ない縄文時代中期の遺物や晩期の埋設土器が出土している。市場遺跡では中世の掘立柱建物跡が検出され、頭無追田遺跡では旧石器時代の遺物と落し穴が検出されている。また、頭無遺跡では平成14年度に神原遺跡で検出された古代の溝の延長部分が検出された。また、鹿兒島県立埋蔵文化財センター（国分市）において報告書作成のための整理作業も開始した。

平成16年度から本格的に整理作業に入り、吹上町に所在する窪見ノ上遺跡・建行ヶ原遺跡・古甲遺跡・西原遺跡・吹上小中原遺跡・馬瀬遺跡・三反半田遺跡の報告書を刊行することとした。

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

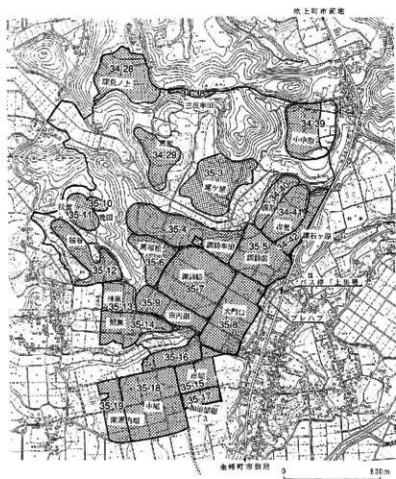
### 第1節 遺跡の位置

農業開発総合センター建設予定地は日置郡金峰町大野と吹上町和田・中之里・入来にまたがって計画され敷地面積180haと広範囲におよぶものである。

金峰町は日置郡の最南部を占め、北側は吹上町、東から東南部にかけては川辺町・鹿兒島市、南側は万之瀬川を隔てて加世田市と接している。また、西側は吹上浜によって東シナ海に面する。金峰山がほぼ中央にそびえ、東から西へ山地・シラス台地・低地・海岸砂丘へと続く地勢を示す。また、万之瀬川の支流堀川・境川・岩元川・長谷川が山地や台地を縫うように西流している。これらの河川に開析された谷が発達し、谷に面した台地上に多くの遺跡が存在する。代表的な遺跡としては、縄文時代の阿多貝塚、弥生時代の高橋貝塚・松木園遺跡、古墳時代の中津野遺跡が知られているが、近年万之瀬川の河川改修に伴う調査で、持株松遺跡・芝原遺跡など古代から中世の重要な遺跡も発見されている。

吹上町は日置郡南部の中心的な位置を占め、北は日吉町、東は鹿兒島市、南は金峰町に接し、西は吹上浜によって東シナ海に面する。東部の金峰山から西へシラス台地、低地、海岸砂丘と続く地勢は金峰町と同様である。また、永古川・小野川・伊作川・堀川により開析された谷と台地を形成している。その台地上に遺跡が存在する。代表的な遺跡としては、縄文時代の黒川洞穴遺跡、弥生時代の入来遺跡、古墳時代の華勢里遺跡・辻堂原遺跡などがある。

南薩地域は、鹿兒島県内でも遺跡の多い地域で、考古学の調査がいち早く行なわれている。特に金峰町・吹上町は前述のように鹿兒島県を代表するような遺跡が目白押しである。農業開発総合センター建設の予定地も広大な台地の中に大小の開析谷が入り込み遺跡の立地条件としてふさわしい地形をなしている。そのため、旧石器時代から近世まで幅広い時代の遺跡が24か所も存在する。各遺跡についてはそれぞれで詳述することにする。



第1図 農業開発総合センター内遺跡群位置図

## 第2節 周辺遺跡

### 1 吹上町

吹上町側は主に農業大学校の計画地であるが、大字入米に窪見ノ上遺跡・馬塚遺跡、大字中ノ里に三反半田遺跡・吹上小中原遺跡、大字和田に建石ヶ原遺跡・古軍遺跡・西原遺跡が存在し、旧石器時代から縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世とほぼ全時期にわたる。

吹上町はこれまでに約100か所の遺跡が知られている。その中には、黒川洞穴のように縄文時代晩期の標識遺跡となっているものもある。

旧石器時代の遺跡は多くはないが、ナイフ形石器文化の塚ノ越遺跡、ナイフ形石器文化と細石器文化の岩之元遺跡が知られている。縄文時代の遺跡は、山間部やシラス台地上に存在する。黒川洞穴は縄文時代前期の壺式土器から晩期の夜白式土器まで長期に及んでいる遺跡で晩期の黒川式土器の標識遺跡である。今木場遺跡は押型文土器や首領式土器など早期から前期の遺跡である。前述の塚ノ越遺跡では縄文時代草創期・早期の遺物が出土している。また、白舟遺跡では縄文時代後期の市来式土器が見られる。

弥生時代の遺跡は多くはないが、弥生時代前期の土器も見られる。入米遺跡では、弥生時代中期の稲渚や妻棺が発見されている。古墳時代は遺跡数も増加し、辻堂原遺跡で見られるように壜穴住居跡が100基を越す集落があり、集落を取り巻くような溝も検出されている。古代～中世の遺跡はまだ未調査のため少ないようである。近年伊作城跡の調査が行なわれその一端が明らかになりつつある。

### 2 金峰町

金峰町側は主に耕種試験場関連の計画地であるが、大字は大野で大野原と呼ばれている広大な台地である。その中に大門口遺跡・諏訪前遺跡・諏訪半田遺跡・尾ヶ原遺跡・馬塚松遺跡・諏訪協議遺跡・宗門塚遺跡・神原遺跡・桜谷遺跡・荒田遺跡・頭無遺跡・頭無迫田遺跡・市瀬遺跡・中尾遺跡・南原内塚遺跡・加治原遺跡とほぼ全域にわたって遺跡が存在する。また、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世と各時期の遺構・遺物が出土している。

金峰町も古くより発掘調査が行なわれ、県内外で著名な遺跡が多い。阿多貝塚は縄文時代前期を中心とした遺跡で、人骨の出土した上焼田遺跡と共に貝塚を形

成する希少な遺跡である。小中原遺跡は旧石器時代・縄文時代早期・古代の遺構・遺物が多く出土した遺跡であるが、現在残っている阿多という地名と同じ「阿多」という文字が刻まれた土師器・須恵器が出土したことで注目された。上水流遺跡では縄文時代中期・後期・晩期の夥しい遺物が出土している。その中には、南島との交流をうかがわせる遺物（南島系の土器）も見られる。弥生時代になると遺跡数も増加し内容も豊富になる。下原遺跡は縄文時代から弥生時代への移行期にあたる遺跡で、初痕の認められる土器片が出土し、早くから稲作が行なわれていたことがうかがえるものである。高橋貝塚は下原遺跡に後続するものであるが、弥生時代前期の土器（高橋式）と共に初痕のある土器片・柱状挟入土器・ノミ形石器・磨製石鏃・磨製石剣・石鎌・石包丁等出土しており、稲作農耕がいち早く伝わってきたことを物語る遺跡である。また、貝塚を形成することや南海岸のゴホウラ貝が出土することから、海洋性に富んでおり南島と北部九州などの中継地としての位置付けも重要視されている。

下小路遺跡では、鹿児島県では数少ない合口妻棺が発見され、弥生時代中期に北部九州との交流があったことが知られる。松木園遺跡は、限られた範囲の調査であるが、弥生時代後期の大溝（幅4～5m・深さ3mのV字状）が発見され環状集落の可能性を想定させられる。また、溝中より出土した多量の土器はそれまで希薄だった弥生時代後期の土器編年欠かせないものである。中津野遺跡からは、弥生時代から古墳時代への移行期にあたる土器群が出土している。万之瀬川改修工事に伴う近年の調査では、特峰松遺跡・芝原遺跡・渡畑遺跡などから古代・中世の遺構・遺物が数多く発見されている。特に中世の中国製陶磁器が大量に出土しており、南島・中国との交流が大きく取り沙汰されてきている。荒平古窯跡群は県内でも数少ない古代の須恵器窯で、生産遺跡の研究上欠かせないものである。

周辺遺跡地名表(吹上町)

	遺跡名	所在地	時代		遺跡名	所在地	時代
1	馬場園	伊作	古墳	23	野中田	人米	古墳
2	吹上高校	今田	弥生	24	萬五塚	〃	古墳・古代
3	窪圃ノ上	〃	古墳・古代	25	小緑	〃	縄文前期
4	小幸田ノ上	〃	古墳・古代	26	人米	〃	弥生
5	今田	〃	弥生	27	松崎	〃	縄文早期
6	西岡	〃	弥生	28	窪見ノ上	〃	縄文早期・中期
7	端松庵跡	〃	旧石器	29	馬廻	〃	縄文早期
8	鳥越坂	〃	縄文・古代	30	三石城跡	湯之浦	中世
9	今田B	〃	弥生前期	31	寺田	〃	弥生・古墳
10	今井ヶ島	〃	縄文・古墳	32	湯之浦山上	〃	縄文早期
11	榎ヶ峯	中原	古墳・古代	33	剣塚塚	中之里	弥生・古墳
12	黒瀬戸	〃	縄文後期	34	宮坂	〃	弥生・古代
13	大圃B	入来	縄文早期・弥生中期・古墳	35	宮坂B	〃	古墳・中世
14	山迫	〃	古墳	36	前原	〃	古墳
15	塚ノ越	〃	旧石器・縄文早期	37	白寿	〃	縄文後期・弥生前期・中期
16	内門堀	〃	縄文早期	38	三反平田	〃	縄文後期
17	川路塚	〃		39	小中原	〃	旧石器・縄文早期・古墳
18	川路塚B	〃	縄文・古墳・中世	40	西原	和田	縄文・古墳
19	春見松	〃	古墳	41	古原	〃	縄文晩期・中世
20	小塚	〃	縄文早期	42	雄石ヶ原	〃	縄文早期・晩期・中世
21	下堂見	〃	縄文早期	43	天ヶ城跡	〃	中世
22	中原ヶ崎	〃	古墳	44	田中城跡	中和山	中世

周辺遺跡地名表(金峰町)

	遺跡名	所在地	時代		遺跡名	所在地	時代
1	塚山	大野	古墳	22	寺下	大野	中世
2	大塚	〃	古墳	23	京田	〃	縄文・古墳・中世
3	尾ヶ原	〃	縄文早～晩期・弥生・古墳	24	京田原	〃	古墳
4	諏訪幸田	〃	縄文・古墳・古代・中世	25	鎮守尾	〃	古墳・中世
5	諏訪前	〃	縄文早期・晩期	26	南原A	〃	縄文中期・後期
6	馬塚松	〃	縄文晩期・中世・近世	27	砂渡池辺	〃	古墳
7	諏訪脇	〃	縄文早期・晩期・中世	28	小塚	〃	古墳・古代
8	大門口	〃	縄文早期・晩期	29	萩ノ上	〃	古墳
9	宗田塚	〃	旧石器・縄文早期・中世	30	地頭塚	〃	古墳・古代
10	荒田	〃	旧石器・縄文早期	31	塚屋敷	〃	古墳
11	秋場	〃	旧石器	32	玄同堀	〃	古墳・中世
12	桜谷	〃	旧石器・縄文早期・弥生	33	主水堀	〃	弥生・古墳
13	神原	〃	旧石器・縄文早期・古代	34	秋葉下	〃	古墳
14	頭無	〃	縄文早期・古代	35	島田	〃	古墳
15	市無	〃	縄文早期・中世	36	宮園	〃	古墳・古代
16	頭無迫田	〃	旧石器・縄文早期・中世	37	幸礼ヶ城跡	〃	中世
17	加治塚	〃	縄文	38	小城田	〃	縄文
18	中尾	〃	旧石器・縄文草創期・早期	39	本寺	〃	古墳
19	南原内堀	〃	縄文後期・晩期	40	前平	〃	縄文・古墳
20	南原外堀	〃	古墳・古代	41	宮の前	〃	縄文・古代
21	原口	〃	古墳・古代				



第2図 周辺遺跡図(吹上町・金峰町) (1/25,000)

### 第三章 層位



第3図 模式柱状図

農業開発総合センター予定地は、日置郡金峰町と吹上町にまたがる南北2km、東西1.5kmの広大な範囲に及ぶ。地形も標高86mから13mと高低差があり、山・台地・沖積地・開折谷と変化に富んでいる。そのため、それぞれの地点で層位が異なっている。第3図は台地部分の標準的な地層の様式図である。

また、以下の各層の説明も標準的なものであり、各遺跡では微妙な違いがある。詳細についてはそれぞれの遺跡において述べることにする。

#### I層 灰黒色土

現在の耕作土。白色の小軽石を含むことによってII層との区別が可能である。地点によってはa・b・cの3層に細分できる。Ic層は黒色に近い色調であるが、3mm大の白色軽石が混在している。中世から近世初めの層である。I層の平均的な厚さは20cm程度であるが、圃場整備により削除されたり、盛り土されたりしており一定ではない。

#### II層 黒色土

弥生時代・古墳時代・奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層である。圃場整備により削除されている部分が多いが、谷の部分などを中心に良好に残存している。層厚10～30cm。

#### III層 黄褐色火山灰土

鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰（BP6400年）とその高植土である。上位（IIIa層）はII層との漸位層であり、やや黒色をおびる。縄文時代晩期及び弥生時代前期の遺物包含層である。中位（IIIb層）は縄文時代前期から後期の遺物包含層である。下位（IIIc層）はアカホヤ火山灰の一次堆積と考えられるが残存状況は悪く、IV層の黄褐色土との境目が明瞭ではない。層厚30～40cm。

#### IV層 黄褐色土

III層と類似するが、より褐色味を帯び、粘質である。縄文時代早期の遺物包含層である。層厚20～30cm。

#### V層 黒褐色土

硬質でよくしまる。2～3cm大の黄褐色のバミスが混入する。縄文時代早期の遺物包含層である。層厚30cm。

#### VI層 暗黄褐色火山灰土

桜島起源の薩摩火山灰（BP11,500年）である。非常に薄くブロック状に堆積している。層厚は厚い所で15cm程度堆積している。

#### VII層 明茶褐色土

粘質土であるが、火山灰の混入によるザラついた感触を持つ。縄文時代草創期の遺物包含層である。層厚10cm。

#### VIII層 茶褐色粘質土

いわゆるチョコ層である。粘質が強く含水率が高い。旧石器時代から縄文時代草創期の遺物包含層である。層厚10cm。

#### IX層 暗茶褐色粘質土

VII層とほとんど同じ土質であるが、VIII層に比べてやや褐色土味を帯び、シルト質化している。旧石器時代の遺物包含層である。層厚30cm。

#### X層 黄褐色シルト質（シラス質）

シラスの腐食したもので、5cm大の黄色軽石を含む。上位には旧石器時代（ナイフ形石器文化）の遺物包含層である。層厚80cm。

#### XI層 白色シラス

始良カルデラ起源のシラス（BP24,500年）である。近辺の露頭では十数mの堆積が見られる。



## 第IV章 窪見ノ上遺跡

### 第1節 調査の概要

#### 1 遺跡の立地及び調査の概要

窪見ノ上遺跡は、吹上町入来字窪見ノ上に所在する。平成10年度に確認調査、平成15年度に本調査を実施した。本遺跡は、農業開発総合センター敷地の北側に位置し、四方に傾斜する丘陵上の台地（標高70m）上に遺跡が広がる。今回、研究果樹園造成に伴う削平部分について、発掘調査を行った。

本遺跡の削平予定地は、台地の2か所に存在する。便宜上1地点・2地点と分けて調査を実施した。この区域は、台地の舌状部分に該当し、西に東シナ海、南に大野原台地から加世田平野までを眼下に見下ろし急激に地形が降下していく地点であり、1地点と2地点の間は谷状を呈している。2地点は工事予定地の一部が茶畑造成時に縄文時代早期の包含層まで擾乱を受けていた。

遺構は、縄文時代早期の集石遺構6基と集積遺構1基、黒色土を埋土とした中世・近世の古道が検出された。

遺物は、1地点の1トレンチのⅡ層から旧石器時代

の遺物が出土し、遺物包含層は、1・2地点ともⅣ層、Ⅴ層を中心として縄文時代早期の上器や石器が多量に出土した。

特に、2地点では縄文時代早期の古い段階である岩本式土器が多く出土した。1地点の出土遺物は早期中葉に位置づけられる石版式土器や押型文土器が多く出土した。2地点の工事予定地はマウンド状の地形をなし、地層の堆積ははっきりしなかった。そのため、早期前葉に位置づけられる岩本式土器が縄文時代草創期・旧石器時代に比定される粘質土層から出土する場合もあった。また、石斧や石斧製作過程で出る剥片が多く出土することから石斧等の石器製作所の可能性が考えられる。

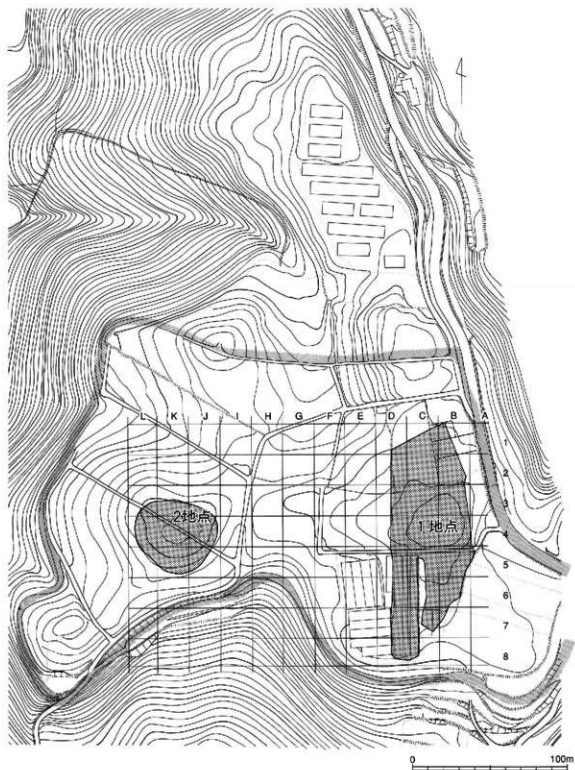
縄文時代の後期については、土器片があまり出せず、剥片類が多く出土した。中世・近世については、遺物がほとんど検出されず、はっきりとした時期の判断ができなかった。

#### 2 遺跡の層序

窪見ノ上遺跡の上層は、農業開発総合センター遺跡群における標準的な層序と同じである。ただし、両地点とも旧石器時代から縄文時代草創期に比定されるⅡ層（チョコ層）直下に安山岩の岩盤があり、シラス層に比定されるⅢ層は確認できなかった。



第1図 窪見ノ上遺跡位置図 (1/25,000)



第2図 周辺地形図及びグリッド図





## 第2節 発掘調査の成果

窟内ノ上遺跡の遺物包含層は、Ⅳ・Ⅴ層とⅥ層の一部で、いずれも旧石器時代及び縄文時代早期に該当する遺構・遺物を包含する層であった。

### 1 旧石器時代の調査

1地点の1トレンチのⅣ層から旧石器時代の遺物が出土したが、剥片及び砕片であり資料として図化することができなかった。この地域においては、工事による削平が旧石器相当層まで及ばないため協議の上、確認調査を終了した。

### 2 縄文時代早期の調査

縄文時代早期は、主にⅣ・Ⅴ層出土のものである。しかしながら第2地点においては、Ⅵ層・Ⅶ層が欠陥したり、薄かったりし整然としていないため、Ⅵ層からも縄文時代早期の遺物が出土する。特に、Ⅰ類土器とした岩式土器は、質量共に特筆すべきものがある。

#### (1) 遺構

遺構は、集石遺構が6基検出され、検出順に1～6号とした。ほぼ調査区全区域Ⅴ層上面で検出され、1地点で4基(1～4号)、2地点で2基(5・6号)、計6基が確認された。どの集石遺構も掘り込みはみられない。他に2地点で集積遺構が1基検出された。

#### ① 1号集石遺構

D-1区で検出された。118個の石で構成されている。重量は、平均10～150gの比較的小ぶりの礫が散逸している。一部被熱による赤化や炭の痕が確認された。

#### ② 2号集石遺構

C-5区で検出された。45個の石で構成されている。10～200gの礫が最も多く、最大2,000gの礫が数点確認された。

#### ③ 3号集石遺構

B-5区で検出された。42個の石で構成されている。重量は、10～100gの範囲が最も多く、安山岩を主に使用している。一部被熱による赤化や炭の痕が確認された。

#### ④ 4号集石遺構

C-7区で検出された。85個の石で構成されている。中央部がイモ穴で攪乱され、集石全体を確認することができなかった。検出された礫から僅かな被熱による

赤化が確認された。

#### ⑤ 5号集石遺構

J-4区で検出された。130個の石で構成され本遺跡の集石の中で最多量検出された。礫の重量は様々で小ぶりの礫が大半を占めるが、1,000gを超す大きな礫が23個も検出された。一部被熱による赤化や炭の痕が確認された。

#### ⑥ 6号集石遺構

J-3区で検出された。27個程度の石で構成されている。100～350g程度の礫が散逸されている。

#### ⑦ 集積遺構

I-2区で検出された。16個の石で構成されている。150～350g程度の礫が堆積している。すべての礫が丸みを帯び、砂岩を使用している。被熱を受けておらず調理施設の機能はなかったと思われる。

#### ⑧ 集積遺構内出土遺物

集積遺構内出土遺物は、磨石、敲石の12点である。

#### 磨石・敲石類

磨石や敲石・凹石については、1個体に磨面や敲打痕、敲打痕の集中による凹みなど複合的な性格を有する石器が多いので、磨石・敲石類を同一群として取り扱うこととする。これらの石器は使用痕の形態により次のように分けた。

#### I類(第10・11図)

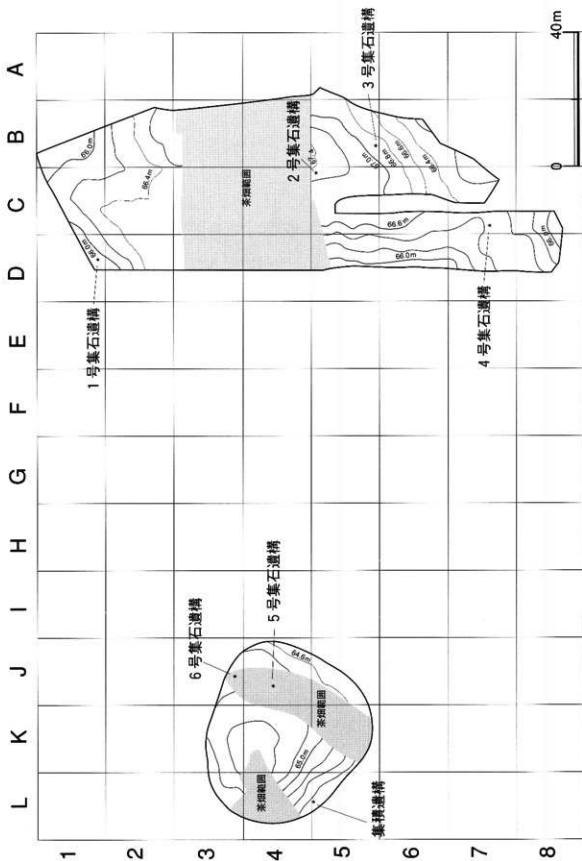
1・2・4～6・9・10は、磨面のみが認められる。1は安山岩製であり、その他は砂岩製である。

多くは上面観も側面観も楕円形に近く左右が対照的な器形を有するが、4は側面観が三角形の器形である。下面や上端側面に磨り痕が明瞭に残される。9は上面にのみ明瞭な磨面が見られる。10は上面観が若干歪みを呈する長軸方向に長い楕円形の器形であり、側面観は上下端部が反っている。彎曲した上面には磨面が見られない。

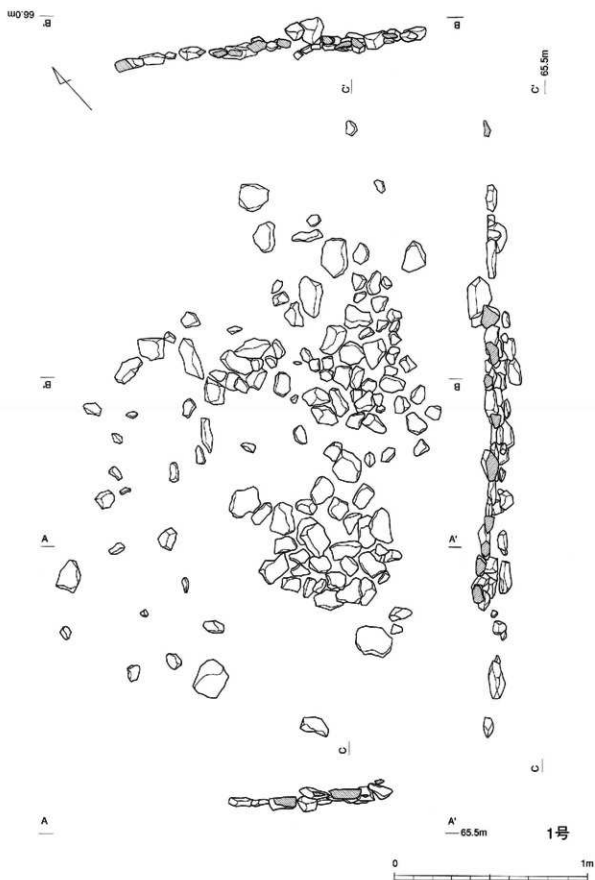
以上の3点を除き、使用痕が残る部位に特徴的な偏り等は確認できない。

#### II類(第10・11図)

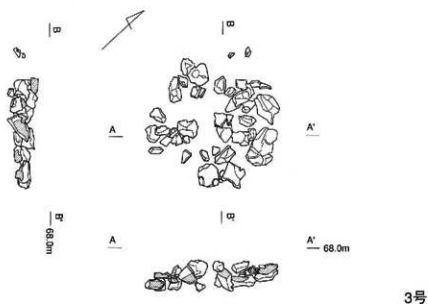
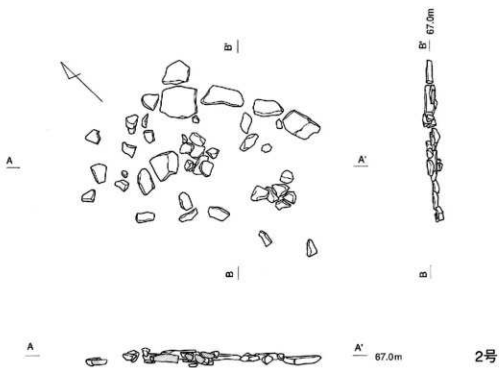
3・7・8・11・12は、磨面と敲打痕が認められるものである。



第5図 V層遺構配置図

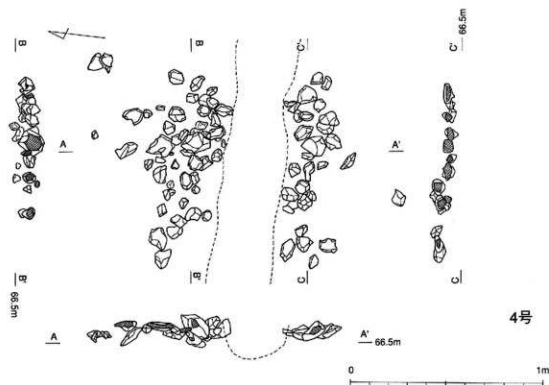


第6図 集石遺構 1



第7図 集石遺構2





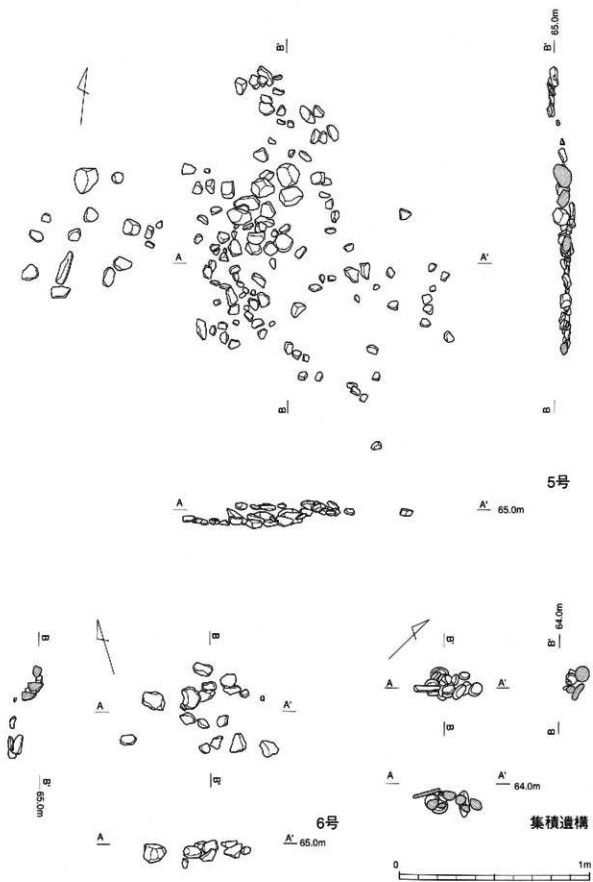
第8図 集石遺構3

3・12は砂岩製で、7が頁岩製、8は安山岩製である。3は三面体の器形であり、上面側左平坦斜面と上下端側縁部に主要な磨面が確認できる。下面には、1cm幅程度の敲打痕が残る。7は上下両面に磨面、側面に敲打痕を有し、下面中央部には敲打による若干の凹みが確認できる。8は鮮明な敲打痕が上下面に4か所

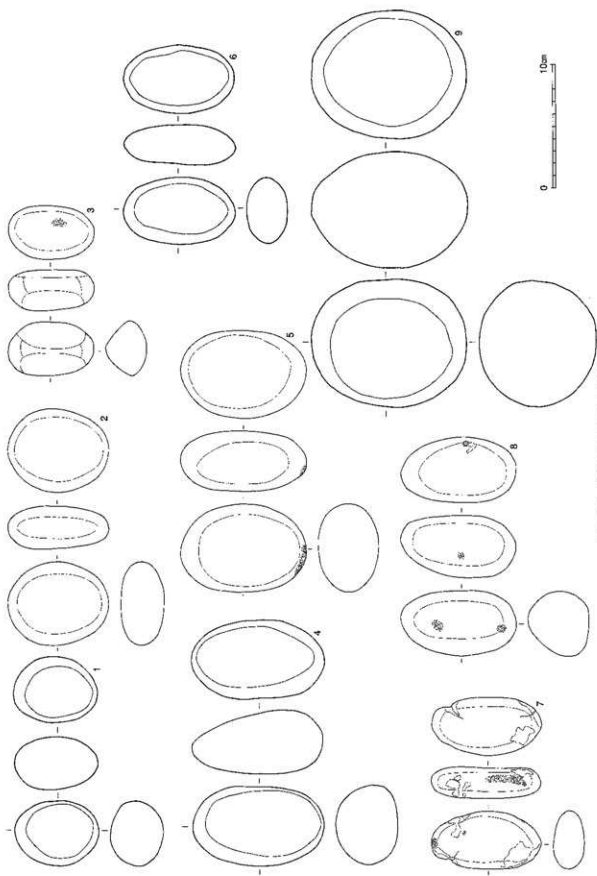
程度見られる。11は棒状を呈し、12は長軸が長い楕円形である。ともに、側縁部には浅い敲きが全周をめぐっている。11の上下半部には長楕円状の凹みがあり、敲打後に磨った痕跡や縦位に走る擦痕が確認できる。12は、上下端部に明瞭な敲打痕が深く残される。

第1表 遺構内遺物観察表

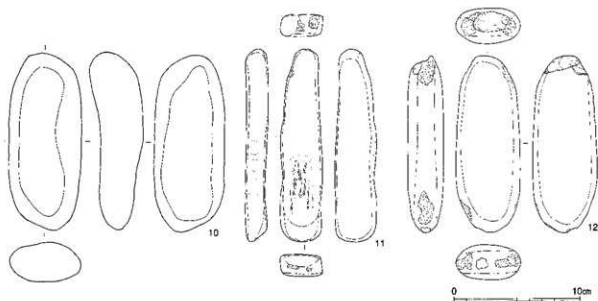
挿図 番号	遺物 番号	出土区	層位 遺構	石 材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
第10 図	1		ss7	安山岩	6.8	5.25	4.2	190	磨石
	2		ss7	砂 岩	8.4	6.8	3.5	250	磨石
	3		ss7	砂 岩	7.0	4.4	3.4	140	磨石
	4		ss7	砂 岩	10.6	6.5	4.9	485	磨石
	5		ss7	砂 岩	10.8	7.2	5.0	480	磨石
	6		ss7	砂 岩	9.0	5.5	3.3	228	磨石
	7		ss7	頁 岩	8.9	4.7	2.5	142	磨石
	8		ss7	安山岩	9.4	5.4	5.0	345	磨石
第11 図	9		ss7	砂 岩	12.5	10.3	9.4	1450	磨石
	10		ss7	砂 岩	14.0	5.7	3.3	420	磨石
	11		ss7	砂 岩	15.5	3.3	1.8	150	磨石
	12		ss7	砂 岩	14.1	5.2	2.8	290	敲石



第9図 集石遺構4・集積遺構



第10図 集積遺構内出土遺物1



第11図 集積遺構内出土遺物 2

## (2) 遺物 (第14~89図)

遺物は、土器、石器が出土した。遺物は、可能な限り全点ドット方式による取り上げを日指した。

### 土器 (第14~54図)

本遺跡において出土した土器は11種類に分類され、縄文時代早期相当の土器がほとんどである。

#### I 類土器 (第14~53・86・87図)

I 類土器は早期前葉の遺物であるが、もっとも多く出土した一群である。

本報告書ではI 類土器を口縁部の文様形態から7分類し、以下に詳述する。

##### I-a 類土器 (第14~19図)

この類は、口唇部キザミ目の下部に横位の二枚貝腹縁部による刺突を2~4条めぐらしている一群である。完形品は13のみで、14・28は胴部下半部及び底部を欠く。

14~25は、口唇部外面に二枚貝の殻頂部を押しつけたキザミ目を有する。13・26~64は、口唇部外面に貝殻や鹿角工具による縦位のキザミ目を有する。大半は口唇部の径差も大きくなく、胎上に含まれる確も極少であるが、30・35・38は他に比して口唇部外面から内面に向けての傾斜が極めて大きく、径7mm程度の確をはじめとして確を多く含むなど特徴的であり、同一個体の可能性が高い。他に16・30・34・35・47が径5mm

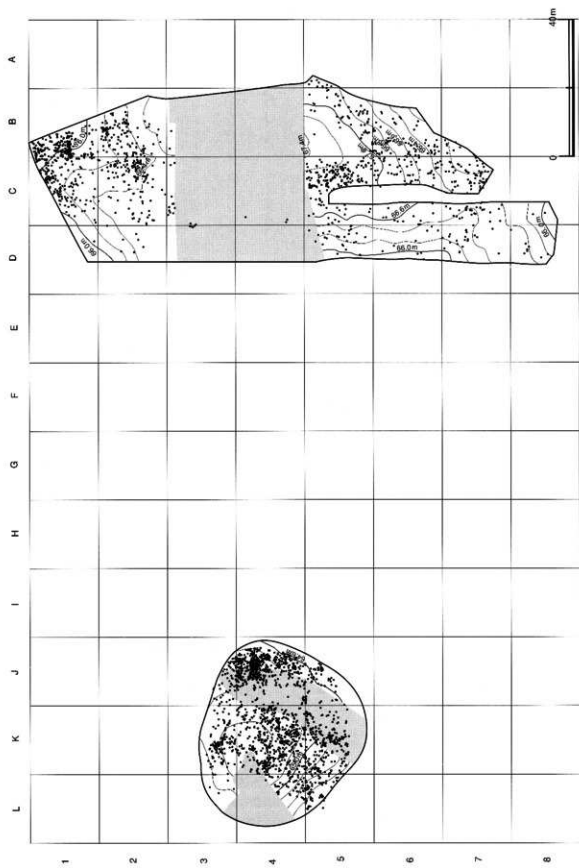
程度の確を含むなど口唇部を引く。14は内外面ともに全面的に丹と思われる赤色顔料の着色が施され、36については内面に逆L字状の丹の着色が確認できる。

##### I-b 類土器 (第20図)

この類は、口唇部キザミ目の下部に、縦位の二枚貝腹縁部による刺突をめぐらす一群である。

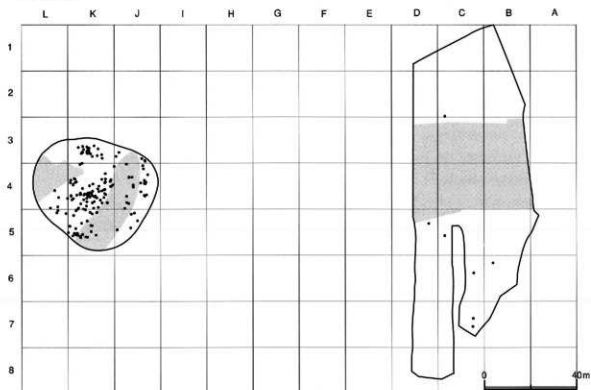
67は底部を除きほぼ完形品に近い形で出土している。口唇部にキザミ目を持たないのが71と74の2点である。71の口唇部断面が隅丸状を呈しているのに対して、74は口唇部上面が擦切状に平坦面を有している。いずれも、口唇部外面下位の文様が縦位の貝殻刺突文であることから、本類に分類した。65・66は、口唇部外面を二枚貝腹縁部によって押しつけた。67~70・73・74は、口唇部外面を貝殻や鹿角工具によって刺突している。これらが縦位の刻みであるのに対して、72は刻みを口唇部外面側と内面側から交互に施している。

口唇部下位の文様については、ほとんどが一段の縦位の貝殻刺突文であるが、69と71は幅1cm程度の縦位の刺突を横高2段めぐらしている。69は3mm程度の狭幅の密な施文であるが、71は8mm程度の広幅であり斜め方向からの深めの刺突が特徴的である。65・66は丁寧なケズリ調整を施してあるが、胎上には径6mm程度の確が含まれる。文様等も含めて類似し同一個体とも思われるが、器厚が若干異なる断定はできない。

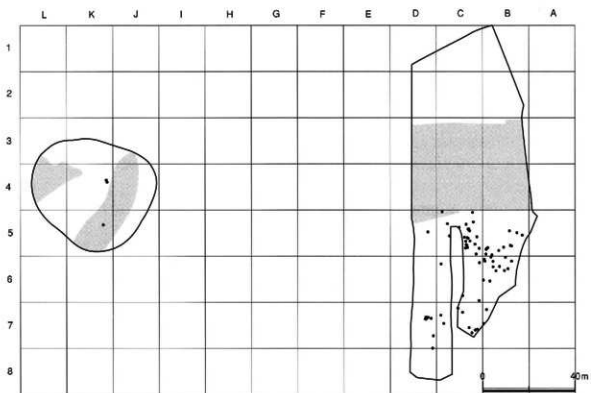


第12図 V層遺物出土状況

I類土器



III類土器



第13図 I類土器・III類土器分布状況

#### I-c 類土器 (第21・22図)

この類は、口唇部キザミ目の下部に、縦位の二枚貝腹縁部による刺突をめぐらし、その下部分に横位の1条の貝殻刺突を施文する一群である。完形品は78の1点のみである。

75~78については、口唇部外面を二枚貝腹縁部によって押し、79~83については、口唇部外面に貝殻や筥状工具によって縦位の刺突を施してある。ほとんどが、縦位施文下には1条の横位貝殻刺突がめぐっているが、75・76は口唇部外面側から貝殻による刻みを施した後、内面側から指による押しで丁寧に調整を施してある。75~77は口唇部下位の文様形態や外面調整が酷似しているが、75・76は口唇部の段差がほとんどないのに対して、77は明瞭に段差を有しており、この3点が同一個体かどうかは定かでない。本類のほとんどは、縦位の貝殻刺突文直下に1条の横位の貝殻刺突文をめぐらしているが、83のみ2条の刺突文が確認される。

胎土については、本類資料が少なく断定はできないが、82・86・87・90・92など小礫を多数含む資料数の割合が高い。

#### I-d 類土器 (第23図)

この類は、口唇部キザミ目の下部に、斜位の二枚貝腹縁部による刺突文をめぐらす一群である。

93は口唇部外面を二枚貝腹縁部によって押し、94~103は口唇部外面を貝殻や筥状工具によって斜位に刺突している。101のみ口唇部刻みを有しないが、口唇部下位の斜位の貝殻刺突の施文形態により、本類に分類した。ほとんどが一定方向に傾斜する斜位の施文であるが、96は上位左下がりと下位右下がりの刺突文を組み合わせたくの字状の施文構成である。

胎土については、94・100に小礫が確認できる程度で、特に礫の包含が特徴的な資料は確認できない。

#### I-e 類土器 (第24・25図)

この類は、口唇部キザミ目の下部に、斜位の二枚貝腹縁部による刺突文をめぐらし、その下部分に横位の1条の貝殻刺突文を施文する一群である。

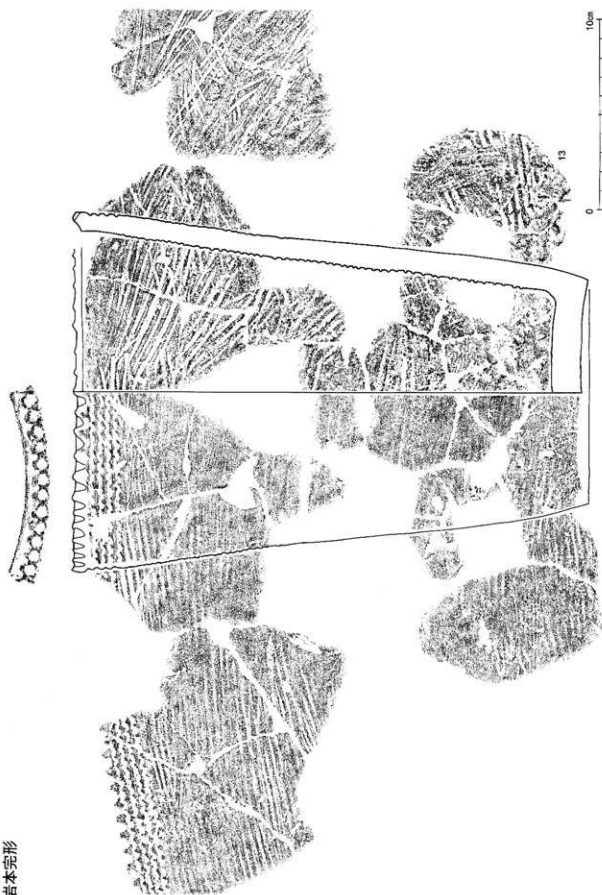
104のみ口唇部外面を二枚貝腹縁部によって押し、それ以外は貝殻や筥状工具による刻み施文であるが、108については刻みが確認できない。ほとんどの資料が、口唇部外面下に斜位の刺突文を施文後、その下に1条の横位の貝殻刺突文をめぐらしているが、108は施文帯下位にやや斜位意味と横位の刺突文が2条確認できる。105・112については斜位の刺突施文後、その直上と直下の2か所に横位の貝殻刺突文をめぐらしているのが特筆される。胎土や色調、施文形態から同一個体であろうと想定される。111・113~115・117・118など砂粒や小礫を含む資料が確認できるが、特に113は9mm程度の小礫が含まれている。

#### I-f 類土器 (第26図)

この類は口唇部下位に文様を有するが、その形態は上記のa~e類及び後述g類に属さない一群である。

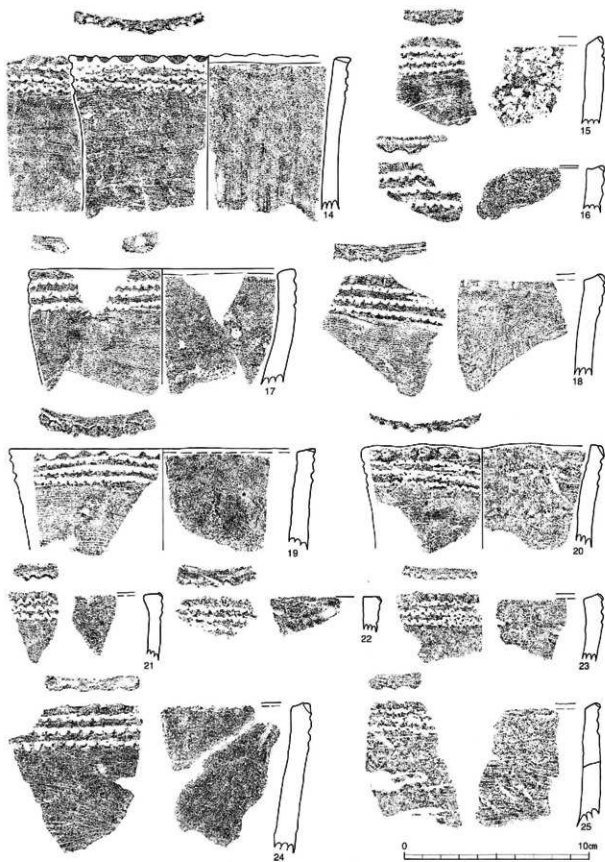
120は口唇部外端部から直下1cm幅程度を、貝殻腹縁部による刺突文を縦位に1条めぐらしており、口唇部刻みと口唇部直下の刺突が統合された文様形態である。その結果、口唇部の断面縦が口唇部内面側は高く外面側に向けて大きく傾斜する形状を呈しており、この口唇部形状は本資料1点のみ確認されている。また、口唇部断面の外側への肥厚が顕著なもの特徴的である。121・122は施文幅2.5~3cm程度の縦位の貝殻刺突文と3条の横位貝殻刺突文が交互に施文されている。123は口唇部外面に刻みを施し、その直下に貝殻肋部を縦位に1条刺突しめぐらしてある。124は口唇部外面のキザミ目直下に、貝殻腹縁部を1cm3mm程度の間隔で波状に押し引いている。この資料は外面の貝殻腹縁部による文様調整が明瞭である。

岩本完形

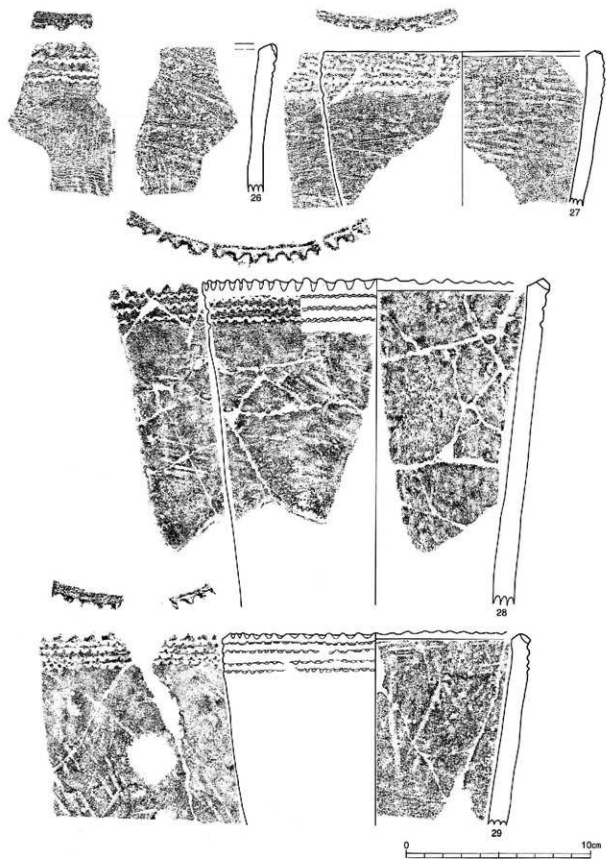


第14图 I期土器1

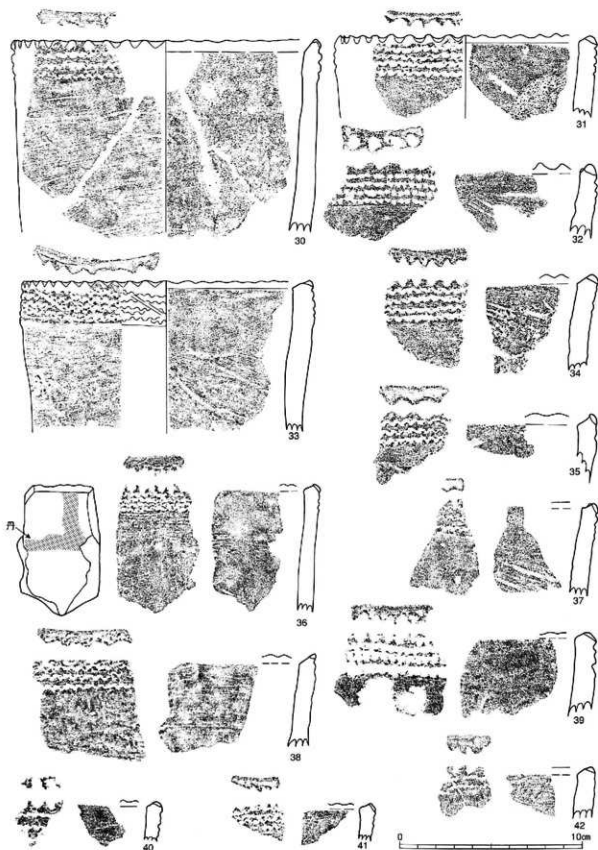




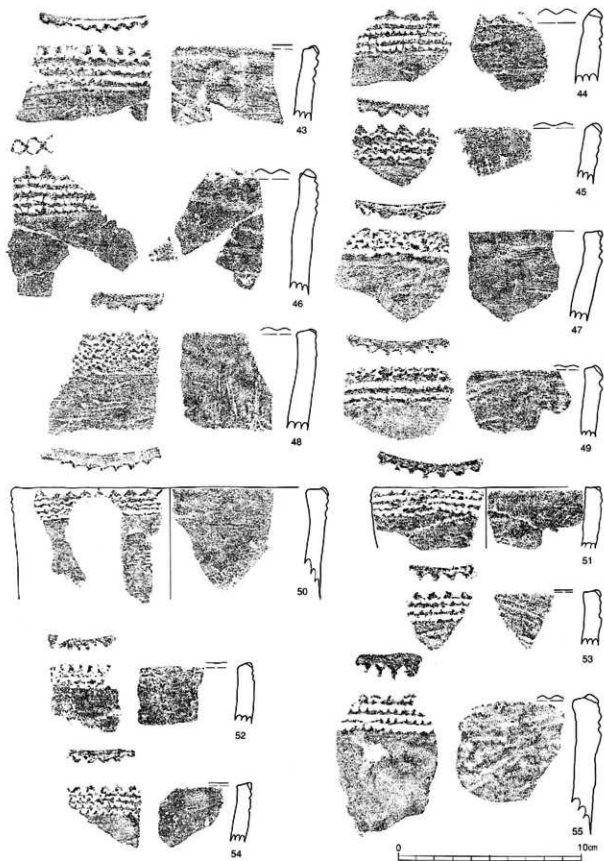
第15図 I類土器 2



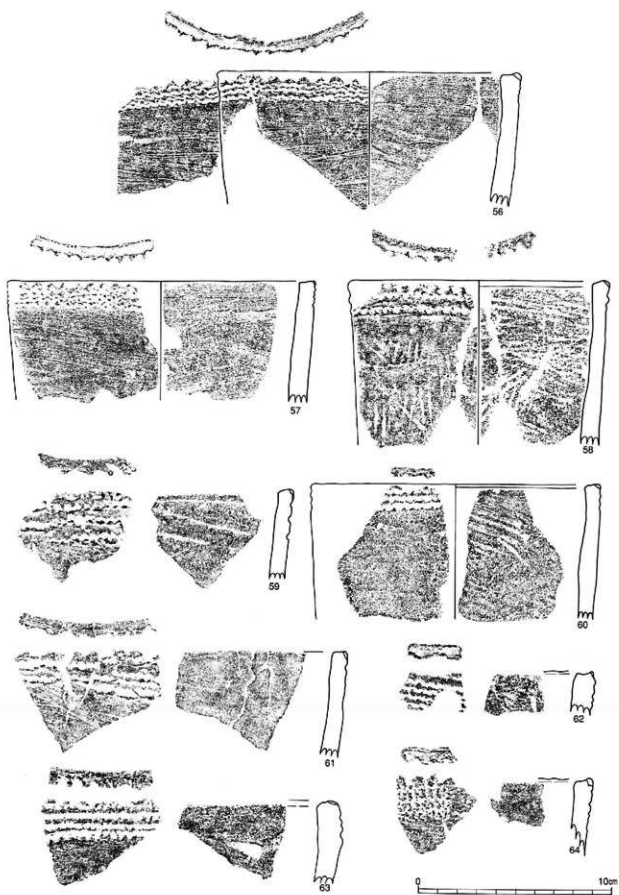
第16図 I類土器 3



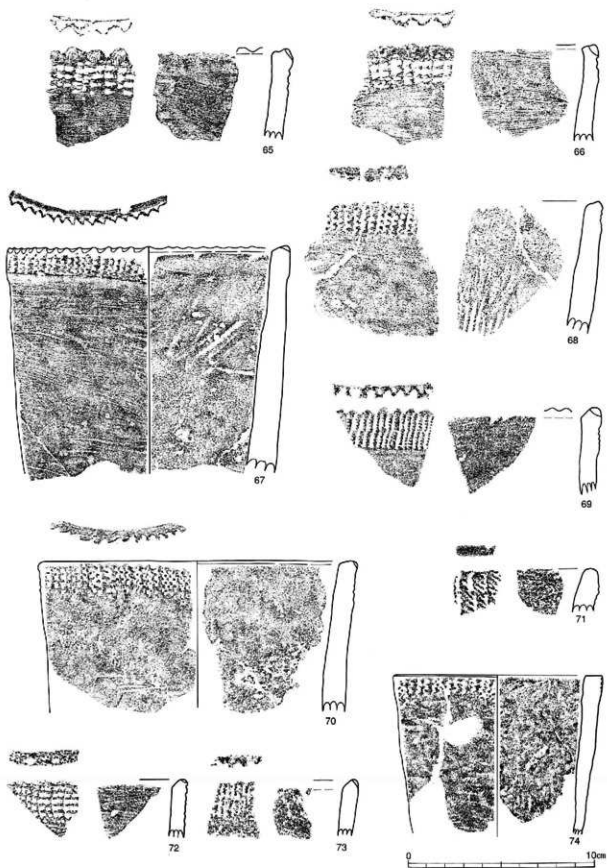
第17图 I類土器 4



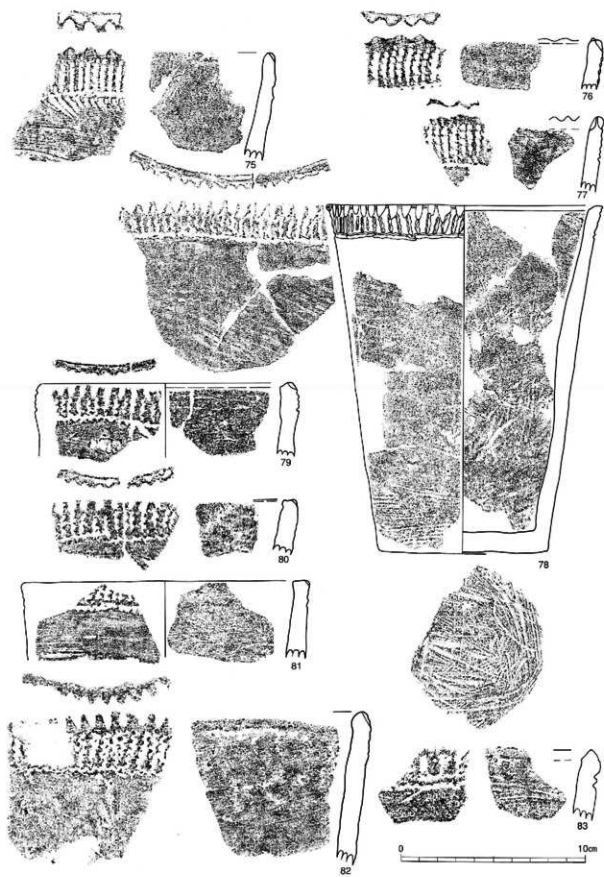
第18図 I類土器5



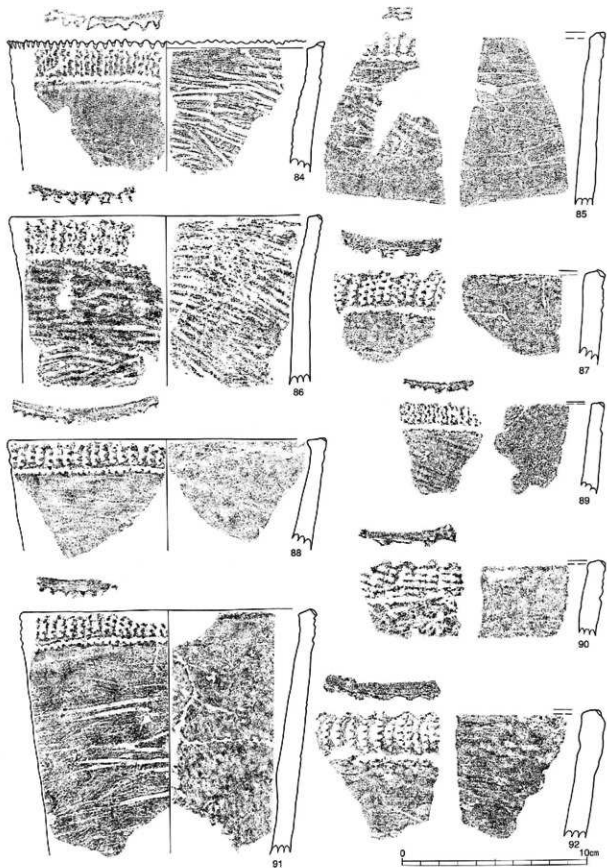
第19图 I類土器 6



第20図 I類土器 7

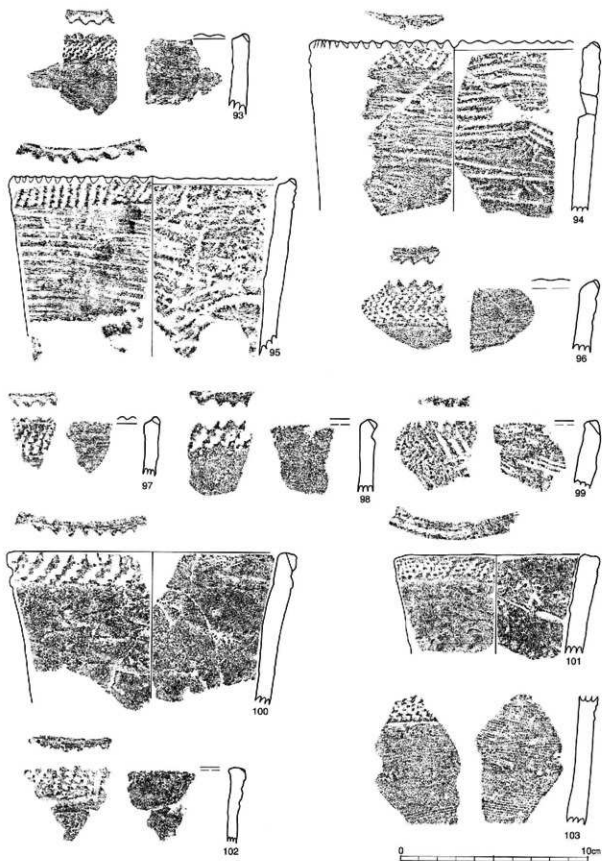


第21图 I類土器 8

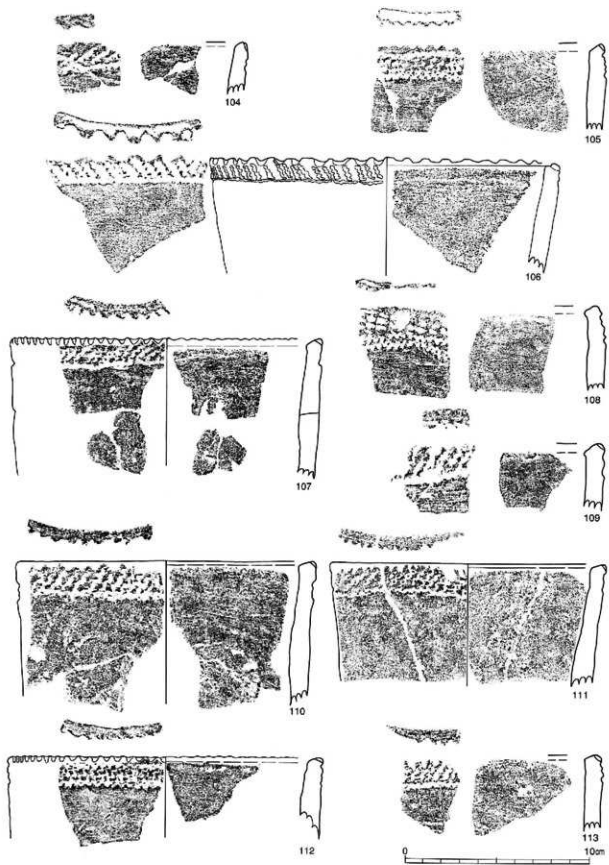


第22図 I類土器9

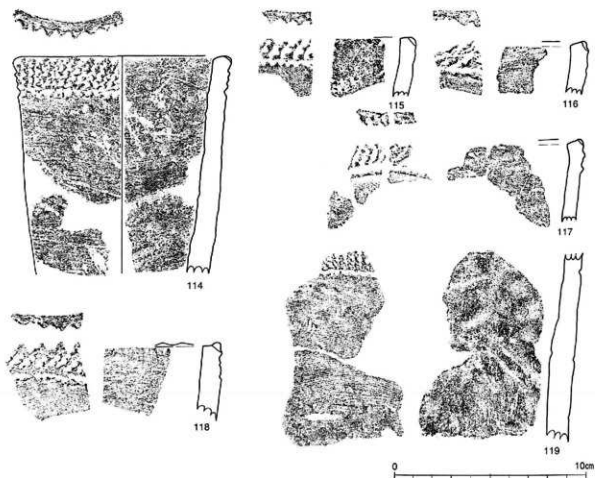




第23图 I 類土器10



第24図 I類土器11



第25図 I類土器12

#### I—g 類土器 (第26～33図)

この類は、口唇部下部に文様がないものやキザミ目及び文様の磨耗が激しく、文様形態等確認できない一群である。

125は器面の磨耗が激しく、口唇部の刻みの有無や口縁部文様の有無・形状は確認できない。126は口唇部に刻みを有し、口縁部には文様が存在するようであるが、磨耗が激しく、文様形態は確認できない。127・128は口唇部の刻みや口縁部の文様を有しない。口唇部上面は、矩形状の平坦面を呈している。

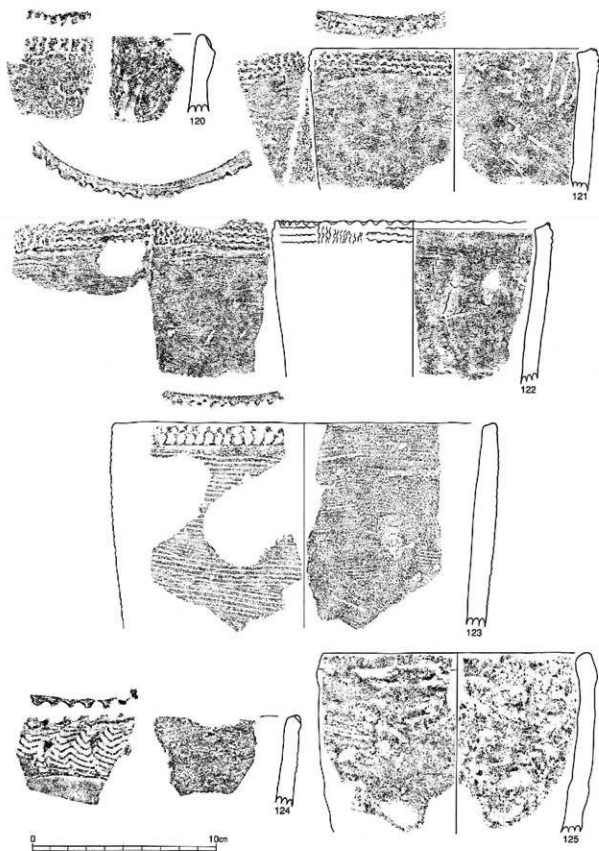
129～164は胴部である。内面の調整については、貝殻条痕後ナデを施してあるのが、131・134・141・145・146・149～151・153・154・157・164である。152は、ケズリと貝殻条痕を施した後、ナデ調整をしている。その他の129・130・132・133・135～140・142～144・147・148・155・156・159～163は、ケズリ後ナデである。155・156については、ハケ目状の丁寧なケズリが見られる。

胎土については、礫が極めて多く含まれるのが、130・131・133・162。次いで多く含まれるのが、153・163である。

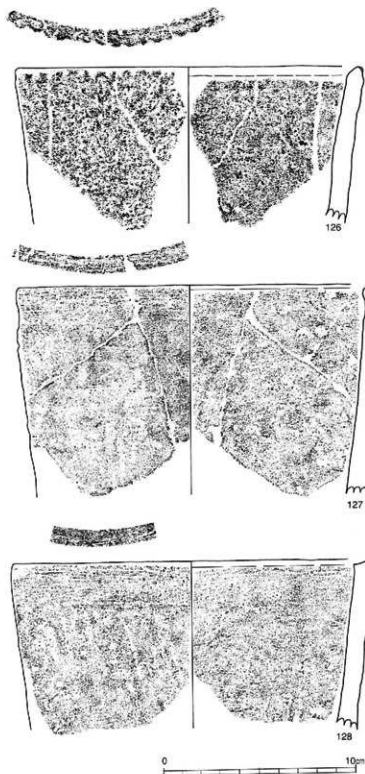
いずれの資料も、胎土に含まれる礫等は極めて少ないが、162のみ1cm程度の小礫など砂粒や礫が多数含まれる。

165～186は底部である。胴部外面下位部分の施文については、165～172は無文であり、173～178は、底部付近に2～3条程度の横位の貝殻条痕が施されている。179～186は、胴部下端付近に縦位の貝殻条痕がめぐらされている。173は、胴部上半部には斜位の貝殻条痕が施され、胴部下半部には横位の条痕が明瞭に残されている。

底部外面の調整については、条痕が施されているのが173・174であり、ミガキが確認できるのが167・170・171・177・178・180～182・185・186である。



第26図 I類土器13



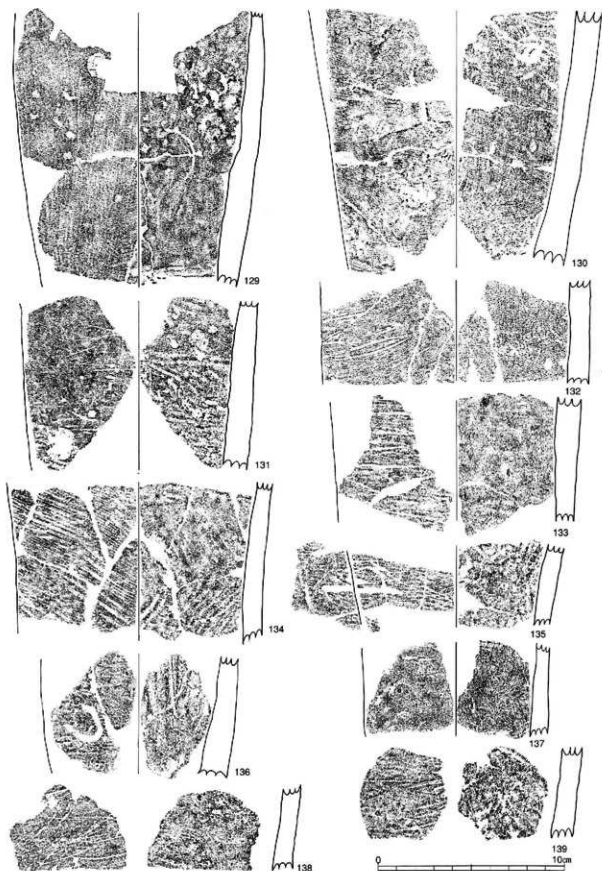
172と177には1-2条の沈線が確認できるが、貝殻条痕によるものか定かでない。171は、底部と胴部の輪槽みによる接合の不完全部分が観察できる。また、胴部下端部が、つまみにより若干外側に張り出している。他に170は、底部から1cm程度上部の胴部外面を横方向にナデ調整した結果、その下部が外側に張り出している。他の資料には底部の張り出しは見られない。

胴部内面の調整については、貝殻条痕を施してあるのが、165・167-169・173-175・178-179・182-185である。167・169は、ハケ目状の丁寧なケズリが見られる。168は胴部の底部に接する面において1cm 2mm程度の幅の貝殻条痕が横方向にえぐるように施され、173・181は同部分において1cm程度の幅の縦方向の貝殻条痕がえぐるように施されている。166・170-172・180・181・186は、ケズリ後ナデ調整である。

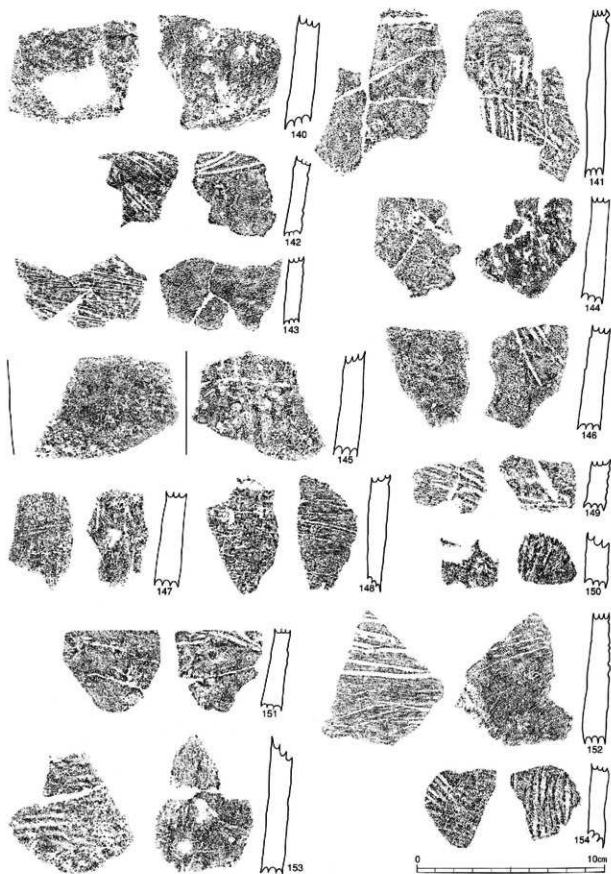
底部の内面調整については、同心円状の貝殻条痕が確認できるのは、165・167・169・173・175・177-179・181・182・185である。

砂粒や小礫が多く含まれるのは、168・170・173・174・179-182・184である。

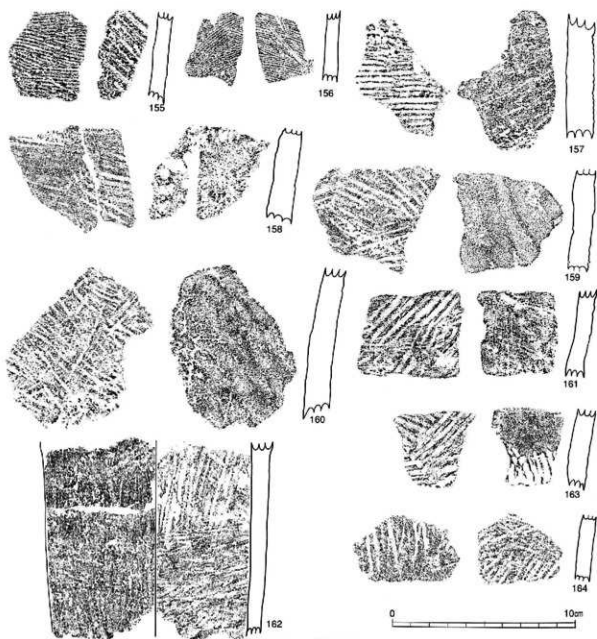
第27図 I類土器14



第28图 I類土器15



第29圖 I類土器16

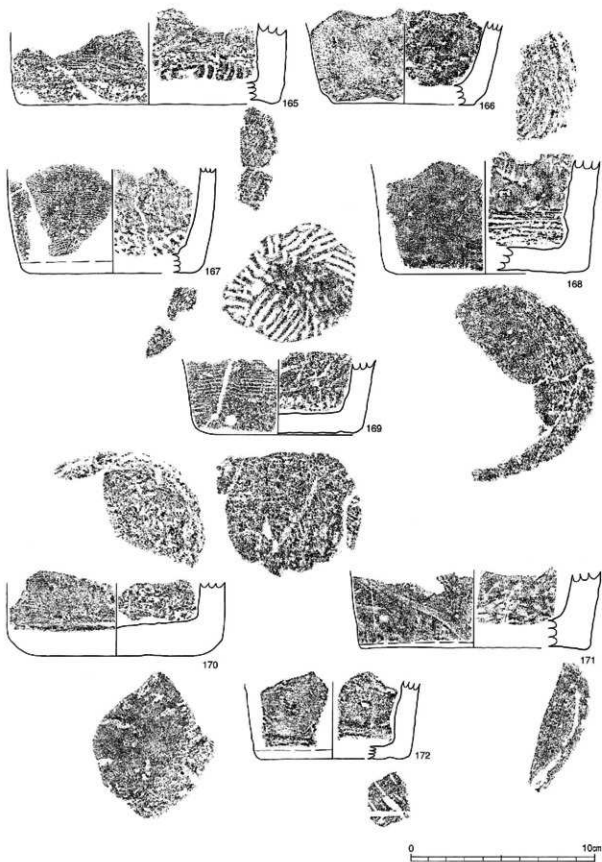


第30図 I類土器17

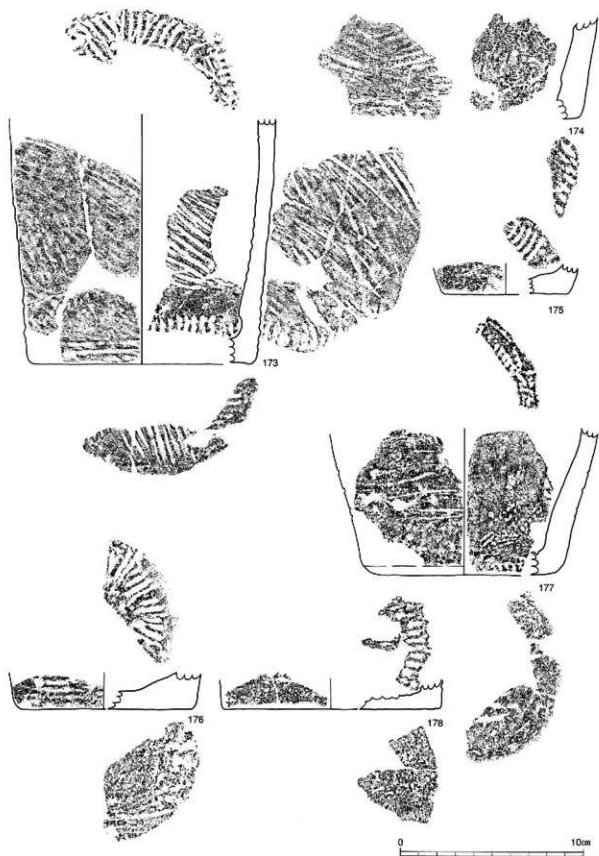
第2表 I類土器観察表 1

神岡 番号	遺物 番号	市土区	層位	色調		胎土			焼成	外面	内面	備考
				外	内	石英	長石	燧石 その他				
第15 区	13	K-5	V	橙	黄	色	○	○		貝殻刺突文	条痕後ナデ	完形
	14	J-5	V	明赤褐色	橙	色	○	○		貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	15			黄	橙	色	○	○		貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	16	K-5	IV	黒褐色	暗灰黄色		◎	○		貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	17	J-3	V	灰黄褐色	灰黄褐色					貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	18	K-4	V	黄	橙	色		○		貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	19	K-4	V	黄	橙	色	○			貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	ハケメ状
	20	K-4	V	黄	橙	色	○			貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	ハケメ状
	21	K-3	V	暗灰黄色	暗灰黄色		○	○		貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	22	K-4	V	暗灰黄色	暗灰黄色		○	○		貝殻押圧・貝殻刺突文	貝殻条痕文ナデ	
	23	K-3	V	橙	色	橙	色			貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	24	K-5	V	橙	色	橙	色	◎	○	貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	25	L-5	V	橙	色	褐	色	○		貝殻押圧・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	

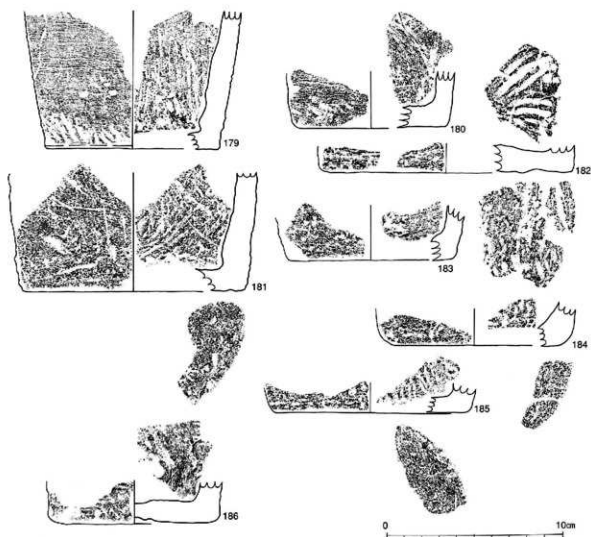




第31圖 I類土器18



第32図 I類土器19



第33図 I類土器20

第3表 I類土器観察表 2

押図 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土				焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石英	長石	顔料	その他				
第16 図	26	J-3	V	橙 色	橙 色					良	貝殻刺突文	貝殻条直文後ナデ	
	27	K-4	V	橙 色	灰ナリ-7色					良	貝殻刺突文	貝殻条直文後ナデ	
	28	K-4	V	橙 色	橙 色					良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	完形
	29		ホナソ	橙 色	橙 色			○	○	良	貝殻刺突文	貝殻条直文後ナデ	
第17 図	30	K-4	IV	橙 色	黄 橙 色	○	◎			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	31		ホナソ	黄 橙 色	黄 橙 色		○	○		良	貝殻刺突文	ナデ	
	32	K-3	V	黄 橙 色	黄 橙 色					良	貝殻刺突文	貝殻条直文後ナデ	
	33	K-5	V	橙 色	橙 色			○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	34			黄 色	黄 色					良	貝殻刺突文	貝殻条直文後ナデ	
	35	K-4	V	灰黄褐色	灰黄褐色		◎			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	36	K-4	IV	黄 橙 色	黄 橙 色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	丹
	37	K-4	V	黄 橙 色	黄 橙 色		○			良	貝殻刺突文	貝殻条直文後ナデ	
	38	K-4	Ⅷ	黄 橙 色	黄 橙 色		○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	39	K-4	Ⅷ	橙 色	橙 色		◎			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
40	J-5	V	暗灰黄色	暗灰黄色			○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		
41		ホナソ	暗灰黄色	暗灰黄色			○		良	貝殻刺突文	ケズリ		
42	J-5	V	灰ナリ-7色	黄 色		○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		

第4表 I類土器觀察表 3

挿入番号	遺物番号	出土区	層位	外 面		内 面		胎 土		焼成	外 面		内 面		備考	
				色	調	石	長石	胎土	其他		色	調	色	調		
第18区	43	J-3	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	44	特77	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	45	K-5	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	46	K-3	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	47	L-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	48	K-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	49	K-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	50	K-3	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	51	3T	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	52	K-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	53		V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	54		V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	55		V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	第19区	56	K-3	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ	
		57	K-3	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ	
58		K-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
59		J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
60		K-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
61		J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
62			V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
63		特77	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
64		K-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
65		J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
第20区	66	K-5	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	67	K-3	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	68	J-5	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	69	K-5	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	70	K-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	71	B-6	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	72	J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	73	K-5	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	74	J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	第21区	75	J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ	ハケム
76		特77	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
77			V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
78		J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
79		特77	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
80		K-5	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
81		特77	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
82		J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
83		J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
84		K-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
第22区	85	J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	86		V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	87	K-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	88	K-5	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	89	K-5	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	90	K-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	91	L-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	92	K-5	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	93	J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	94		V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
第23区	95	K-3	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	96	K-3	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	97	J-5	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	98	J-3	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	99		V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	100	J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	101	J-3	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	102	K-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	103	K-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	104	J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
第24区	105	J-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	106		V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	107	K-5	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	108	K-5	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	109		V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	110	K-4	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	111	K-5	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	112	特77	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		
	113	K-3	V	黄	色	黄	色			良	良	白	白	ナデ		



## Ⅱ類土器 (第34・35図)

器形については、円筒形は195・199・200、角筒形は192・196・197・202が確認でき、他の土器片については、小片のため器形を確定できない。口縁部の断面図が、187は舌状に丸みを帯び、188と189は平坦面を有する。188は口唇部外端に錠状工具によると思われる縦位の刻みが施されている。184は口唇部の形状から波状口縁を呈すると想定される。188と194は、半口縁と思われるが、被見できる口唇部の土器片が少なく確定できない。

口縁部から胴部に至る文様や調整については、187は左下がりと右下がりの貝殻条痕を菱形状に交差させた後、口縁部に縦位の貝殻腹縁による刺突文を非連続的に4条程度施している。188は、全面的に縦位の貝殻条痕を施した後、口縁部に横位の貝殻腹縁による刺突文を2条めぐらしている。胴部には斜位の数条の細沈線が確認できるが、造作意図に基づくものかどうかは不明である。189は、縦位の貝殻条痕のみ確認できる。190・191は斜位の貝殻条痕施した後貝殻刺突文を縦列

に連点状に施してあり、施文形態より同一個体の可能性がある。192は斜位の貝殻条痕施した後1cm幅程度の斜位の貝殻刺突文を縦列に施文させている。193は、斜位の貝殻条痕施した後、縦位の貝殻刺突文を2条縦走させている。194は縦位の貝殻条痕を施した後、口縁部に4～5条程度の横位の貝殻刺突文をめぐらしている。胴部に一部貝殻刺突文を縦走させている痕跡が伺える。195は縦位の貝殻条痕施した後、縦位もしくは斜位の貝殻腹縁による連続刺突文を数条施してある。197・198は同一個体と考えられ、斜位の貝殻条痕施した後縦位に貝殻腹縁部による連続刺突文を施している。195・196より刺突文の施文間隔が密である。199～201は底部の資料である。199は胴部外面においては、斜位の貝殻条痕施後に縦位の連続刺突文を施し、底部付近においては数回丁寧な条痕文を2.5cm幅程度に縦列に施文している。底部内外ともに丁寧に磨きがかけている。200～202は底部付近に丁寧な貝殻条痕が施されている。200の底部外面は、丁寧に磨きがかけている。

第6表 Ⅰ類土器観察表 5

挿入 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土			焼成	外 面		内 面	備考
				外	内	石英	長石	黒石		その他	外面		
第 33 図	183	K-4	Ⅲ	褐色	褐色		○		良	ナデ		貝殻条痕文	
	184	K-4	Ⅲ	藍色	藍色				良	ナデ		貝殻条痕文	
	185			褐色	黄褐色		○	○	良	ナデ		貝殻条痕文	
	186	K-4	Ⅲ	褐色	褐色		○	○	良	ナデ		ナデ	

第7表 Ⅱ類土器観察表

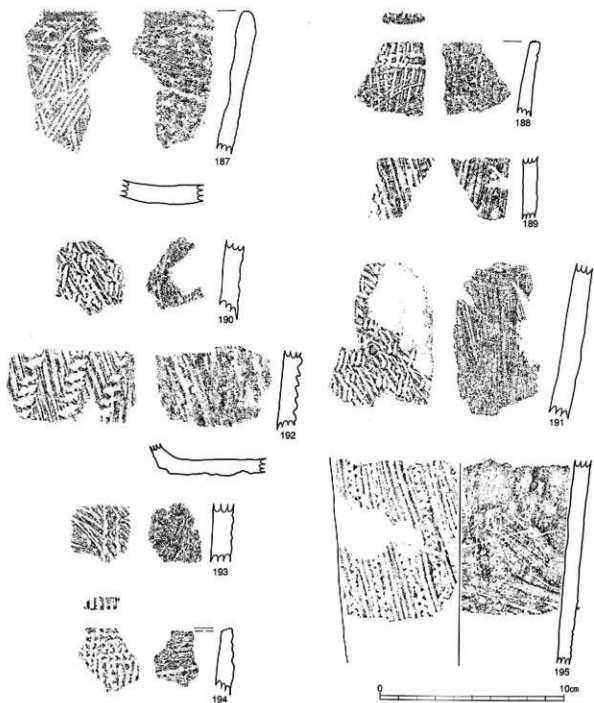
挿入 番号	遺物 番号	出土区	層位	色 調		胎 土			焼成	外 面		内 面	備考
				外	内	石英	長石	黒石		その他	外面		
第 34 図	187	C-5	Ⅳ	灰黄褐色	灰黄褐色		◎		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	188		V	藍色	暗灰黄色			○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	189	L-4	V	暗灰黄色	浅黄色		◎	◎	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	190	J-3	V	褐色	褐色		◎		良	貝殻条痕文後縦位刺突	ケズリ後ナデ		
	191	J-4	V	褐色	褐色		◎		良	貝殻条痕文後縦位刺突	ケズリ後ナデ		
	192	J-4	V	褐色	褐色	○	◎	◎	良	貝殻条痕文後口蓋刺突	ケズリ後ナデ		
	193	J-4	V	赤褐色	黒褐色		◎		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	194	J-4	V	褐色	褐色		◎	◎	良	貝殻刺突文	貝殻条痕文後ナデ		
	195	J-4	V	黄褐色	褐色		◎		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	196	J-4	V	浅黄色	暗灰黄色				良	貝殻条痕文・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		
	197	J-4	V	赤褐色	赤褐色		◎	◎	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		
第 35 図	198	J-4	V	赤褐色	赤褐色		◎		良	縦位刺突	ケズリ後ナデ		
	199	D-8	Ⅳ	赤褐色	暗灰黄色		◎	◎	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		
	200	J-4	Ⅳ	褐色	褐色		◎		良	沈線文	ナデ		
	201	J-4	V	黄褐色	黄褐色		◎	◎	良	沈線文	ケズリ後ナデ		
	202	J-4	V	褐色	褐色		◎	◎	良	沈線文	ナデ		

## Ⅲ類土器 (第36～42図)

このⅢ類の土器は、口縁部の器形により2群に分類し評述することとする。

## Ⅲ-a類土器 (第36～38図)

器形は胴部でわずかに膨らみを帯び、頸部は若干しまり口縁部が大きくもしくは緩やかに外傾する一群である。



第34図 II類土器 1

口唇部にキザミ目を有するのがほとんどであるが、203・204・209の3点はキザミ目がない。キザミ目の施文部位は、口唇部上面、口唇部内面側縁端部、外面側縁端部の3か所に類別される。

口縁部の文様については、斜位の貝殻刺突をめぐらせるのが、203～207・209・212・216・218～224であ

り、くの字状の貝殻刺突文を施すのが208・210、横位の刺突文をめぐらせるのが211・213・215、羽状文を施すのが216・217である。

胴部の文様については、203・207・211・213・214・216が綾杉文で構成されており、205は縦位の貝殻条痕、206は斜位の貝殻条痕が確認できる。

内面の調整については、228は貝殻条痕後ナデを施してあるが、それら以外は、全てケズリ後ナデ調整をしてある。胎土の状態では、礫が極めて多く含まれるのは見受けられない。

### Ⅲ b 類土器 (第39・40図)

口縁部が直行ないしは山形口縁を有する一群である。大半が平口縁であるが、可能性を含めて228～230・232・234～236は波状口縁を呈していると考えられる。大半の資料が器壁8mm～1cm程度で、a類と大きな違いは見られないが、229・230・232・235は帯い部位で5mm程度と器壁が薄い。

口唇部に刻みを有する資料の割合は、a類に比して少ない。221・222は口唇部上面に1条の列点が横位で施され、胎土や文様の類似性から同一個体の可能性が高い。228は口唇部上面に縦位の刺突文が施される。232・235も器形や文様、胎土が類似しているのと同個体と思われる。口唇部上面に貝殻条痕線による1条の列点文が横位で施されている。それら以外の資料については、口唇部上面にキザメ目は確認できない。

口縁部については、220～230は直行し、231～235は口縁部がやや内寄気味で瘤状突起を有し、236は口縁部がやや外反し瘤状突起を有している。

口縁部の文様については、縦位や斜位の貝殻刺突文を1条めぐらせるのが、220～225・227。縦位の刺突文を2条めぐらせるのが226。横位の刺突文をめぐらせるのが220、くの字状に貝殻刺突文を施すのが228～230・232である。233・234・236は棒状工具により径5mm程度の列点を2条横方向にめぐらしている。他に、232・233・236は、貝殻羽状文を施文後に、下位部分に1条の横位の貝殻刺突文をめぐらしてある。

胴部の文様については、223～225・227は横位の貝殻条痕、226・228は横位と斜位の条痕、229・230・236は縦位もしくは斜位の貝殻条痕が施されている。232・233は斜位の条痕調整後に左下がりと右下がりの斜位の貝殻刺突文が施文されている。

内面の調整に関しては、228のみが貝殻条痕後ナデを施し、それら以外は、全てケズリ後ナデ調整をしてある。

胎土については、小礫が多く含まれるのは見受けられない。

237～252は胴部である。252は資料中位部分に外側への屈曲が見られ、外反する頸部付近の資料と推察される。指の押斥の痕跡が確認できることから、土器製作過程の一端がうかがえる資料である。

外面調整については、238・249・252の3つのみ縦位の貝殻条痕であり、あとの殆どが二枚貝腹縁による棒状文である。

内面調整に関しては、250のみが貝殻条痕調整であり、大半はケズリ後ナデの調整である。砂粒や小礫が多く含まれるのは239・252であり、その他については、礫はあまり含まれない。

253～259は底部である。器形について、254及び256はつまみ出しにより、胴部下端部が外に張り出している。255は底部からの下面観が部分的に多角形の様相を呈しているが、縦位の貝殻条痕と横位の貝殻条痕の調整圧が、器形の形状に変化をもたらしたものと考えられる。

胴部外面調整については、254は斜位及び横位による貝殻条痕を施し、底部付近で縦位の押引状の刻みを施してある。255は、縦位の貝殻条痕と一帯胴部下端にて横位による貝殻条痕を施した後、丁寧なナデ調整を施してある。256～258は、斜位や横位の貝殻条痕、259は縦位の貝殻条痕が確認できる。底部外面では、いずれも丁寧にミガキをかけてある。

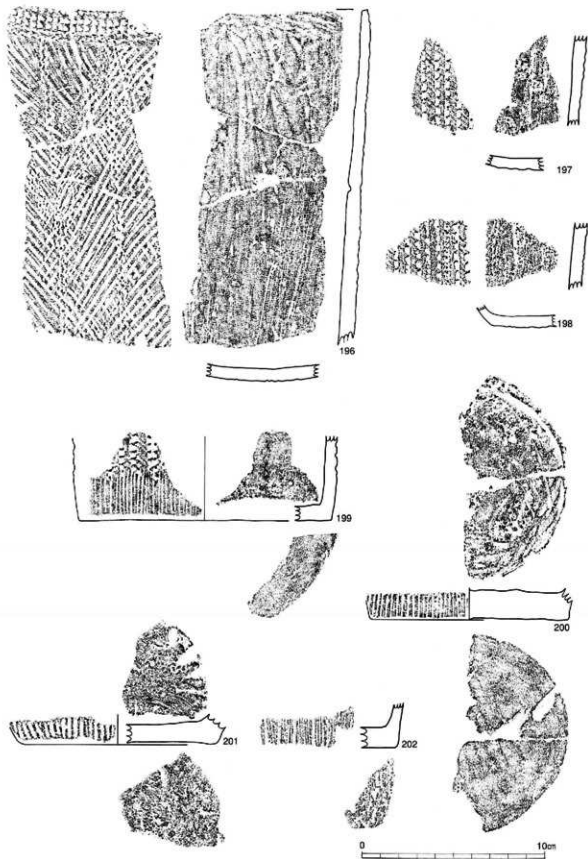
胴部の内面調整については、258のみが貝殻条痕であり、それら以外はいずれもケズリ後ナデの調整をしてある。底部内面においても、条痕による調整は確認できず、全て指ナデと推定される。

胎土については、小礫が多く含まれるのは257・258の2点のみである。

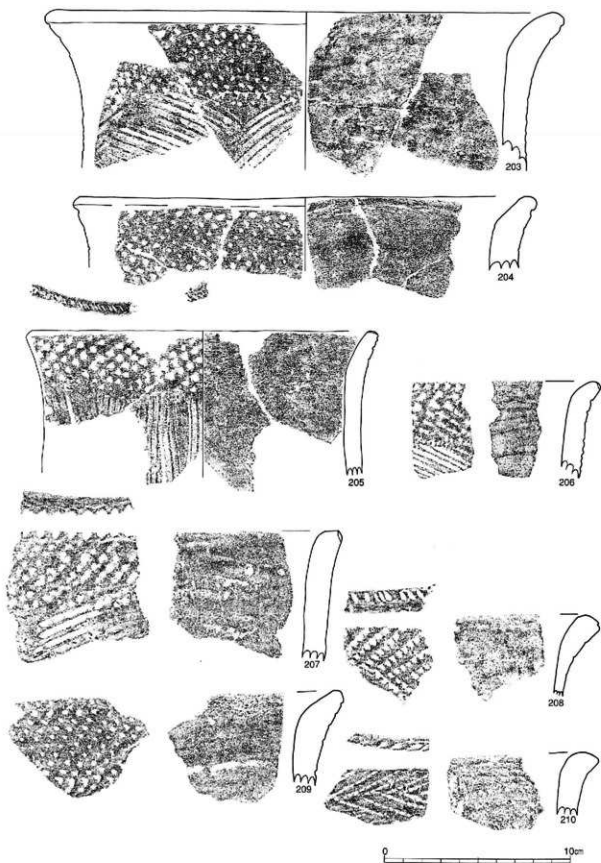
第8表 Ⅲ類土器観察表1

挿図 番号	遺物 番号	出土区 窟位	色調		胎土			焼成	外面		内面	備考	
			外	内	石英	長石	砂		その他				
第 36 図	203	C-5	Ⅳ	黄褐色	黄褐色	○	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ		
	204	B-6	V	橙褐色	褐色	○	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		
	205	K-4	V	黄褐色	黄褐色	○	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	206	C-5	Ⅳ	黒褐色	赤褐色	○	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ナデ		
	207	B-5	Ⅳ	褐色	褐色	○	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	208	C-7	V	褐色	褐色	○	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		
	209				灰黄褐色	灰黄褐色	○	○	○	良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	210	B-7	V	黒褐色	赤褐色	○	○	○	良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		

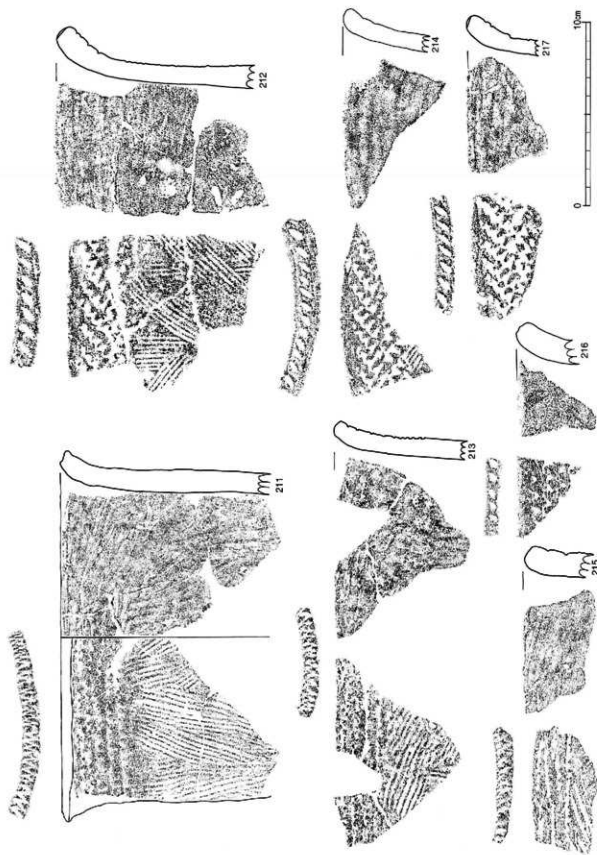




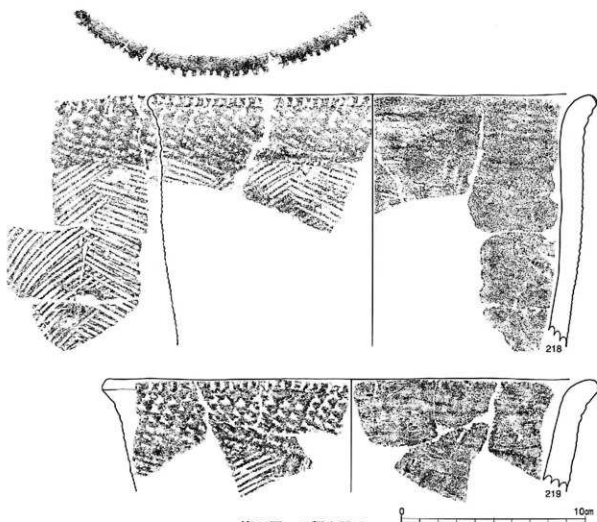
第35圖 II類土器 2



第36図 III類土器 1



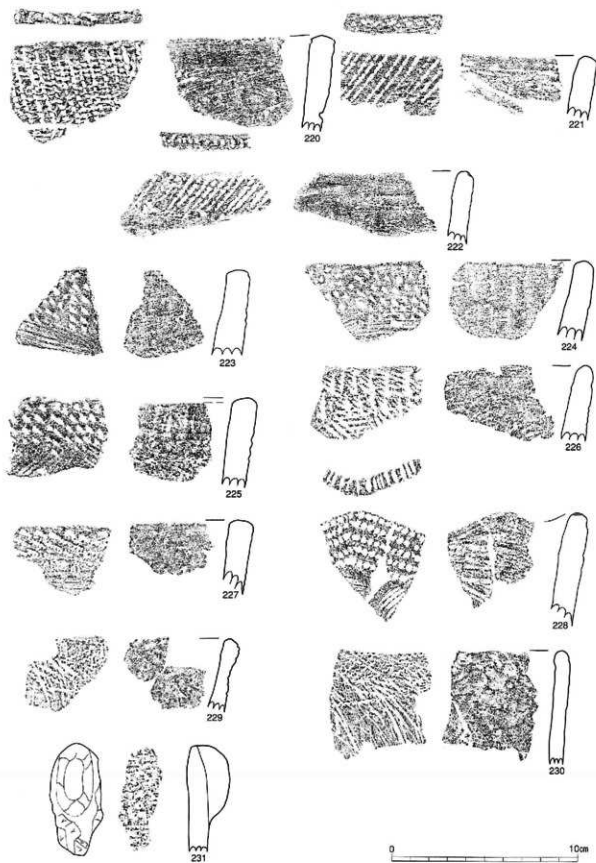
第37図 Ⅲ類土器 2



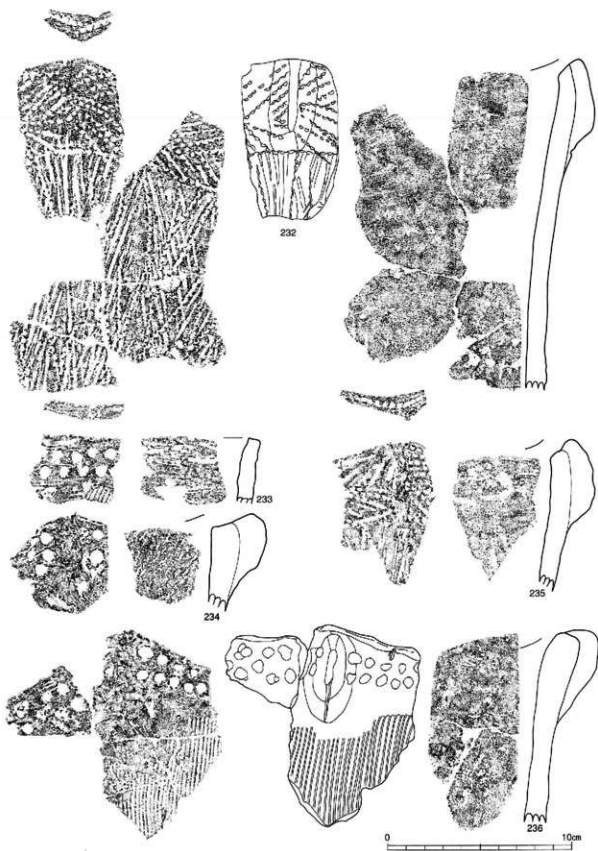
第38図 III類土器 3

第9表 III類土器観察表2

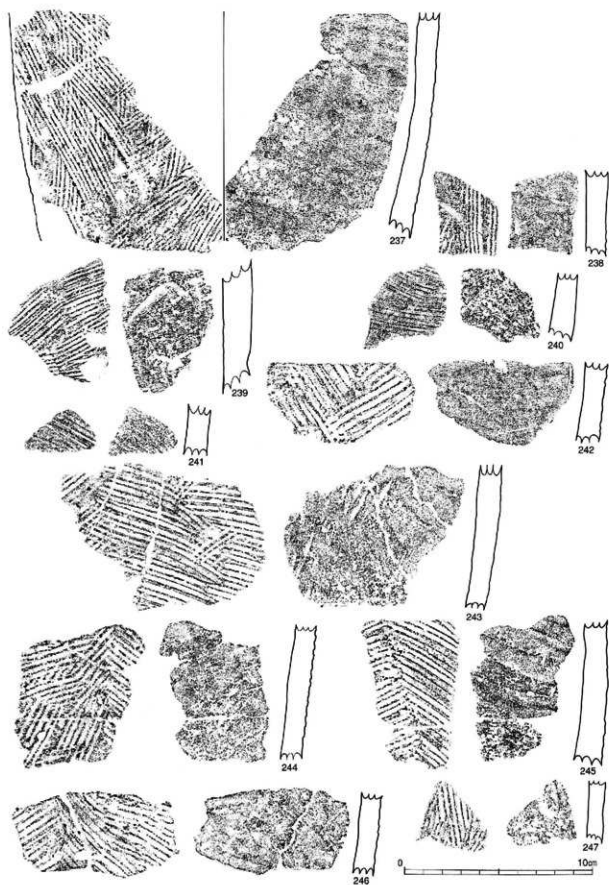
挿図 番号	遺物 番号	出土区 層位	色調		胎土			焼成	外面	内面	備考	
			外	内	石英	長石	角閃					その他
第37 図	211	C-6	IV	赤褐色	赤褐色	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	212	D-7	IV	明黄褐色	黄褐色	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	213	C-7	V	黄褐色	褐色	○	○		良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ	
	214	D-8	IV	黄褐色	黄褐色	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	215	C-6	IV	赤褐色	赤褐色	○	○		良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	216	B-5	IV	褐色	褐色	○	○		良	貝殻刺突文後ナデ	ナデ	
	217	D-8	IV	暗灰黄色	黄褐色	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第38 図	218	C-5	IV	褐色	褐色	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	219	C-5	IV	褐色	褐色	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	220	C-5	IV	赤褐色	黄灰色	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
第39 図	221	B-6	IV	黄褐色	黄褐色	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	222	C-5	IV	灰黄褐色	灰黄褐色	○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	223	B-5	V	褐色	褐色	○	○		良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ	
	224	B-5	IV	褐色	褐色	○			良	貝殻刺突文	ケズリ	
	225	C-5	IV	褐色	明赤褐色	○			良	貝殻刺突文	ケズリ	
	226	B-5	IV	橙黄色	暗灰黄色	○			良	押引文	ケズリ後ナデ	
	227	B-6	IV	橙黄色	橙黄色	○			良	押引文	ケズリ	
	228	C-5	IV	黄褐色	黄褐色	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	貝殻条痕文後ナデ	
	229	C-5	IV	橙黄色	橙黄色	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文		
	230	C-5	IV	橙黄色	橙黄色	○			良	貝殻刺突文・貝殻条痕文	ケズリ後ナデ	
	231			IV	橙黄色	橙黄色	○			良		



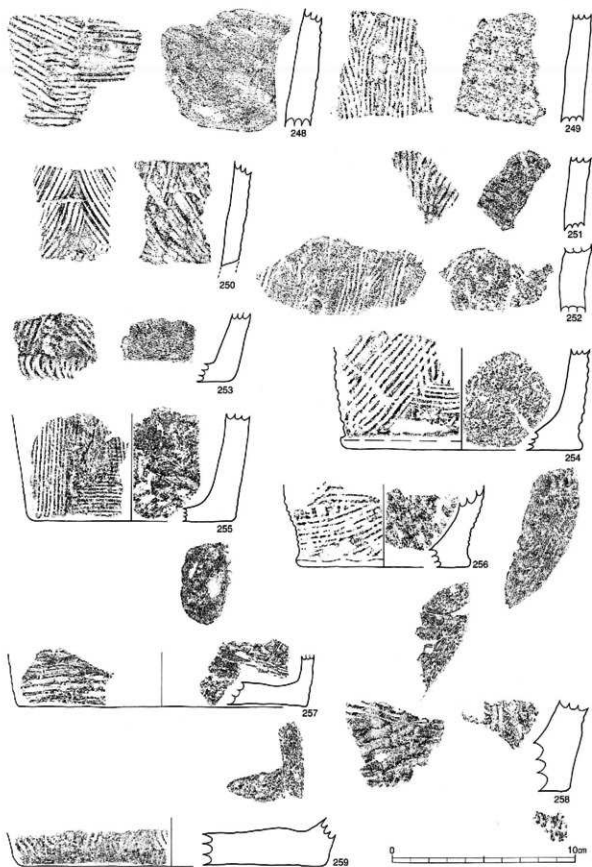
第39图 III类土器 4



第40図 III類土器 5



第41图 III類土器 6



第42図 III類土器 7



### Ⅳ類土器 (第43・44圖)

260~262は、施文具として貝殻版縁部を使用し、左下がりや右下がりの刺突を数条ずつ交互に繰り返すことで、見かけ上、羽状文を呈する。胴部においては、貝殻刺突文により羽状文あるいは縦歯文を縦方向に施文している。

完形品は260の1点である。260は、底部から口縁部にかけて広がり気味に立ち上がるが、器形は左右対称でなく立ち上がる角度が左右で異なる。口縁部ではやや内傾する。口縁部には横位の6条の浅くかつ細い丁寧な貝殻刺突文が連続して施され、口縁部直下の左右に相對して長さ15cm、幅1cm、膨らみ5mm程度の横位の突起が添付する。口縁部直下から底部にいたるまで浅く細い丁寧な羽状文が施文されている。1対2穴の補修孔が4cm幅の間隔で施されている。261は口縁部が直行ないしわずかに内弯する。平坦面を有する口唇部上を貝殻版縁部による横位の1条の刺突で施文している。

262は、胴部の資料であり、261より施文間隔が広めである。263~265は同一個体である。263・264は山形の口縁部である。わずかに内弯し、口唇部は内傾する平坦面を有する。Ⅳ類土器としては希少な角筒形である。

貝殻版縁部を使用して、口縁部は横位もしくは若干斜位に刺突し、胴部においては全て同一方向に斜位に刺突している。同一方向に刺突することで、羽状文を呈しない。口縁部に3cm位の横位の連続刺突を施文し、胴部には斜位の刺突文を施してある。

内外面は丁寧にミガキやナデが施され、外面の文様も刺突文の間隔が密で丁寧である。

### V類土器 (第45~48圖)

この土器群は、文様形態から4つに分類して詳述することとする。

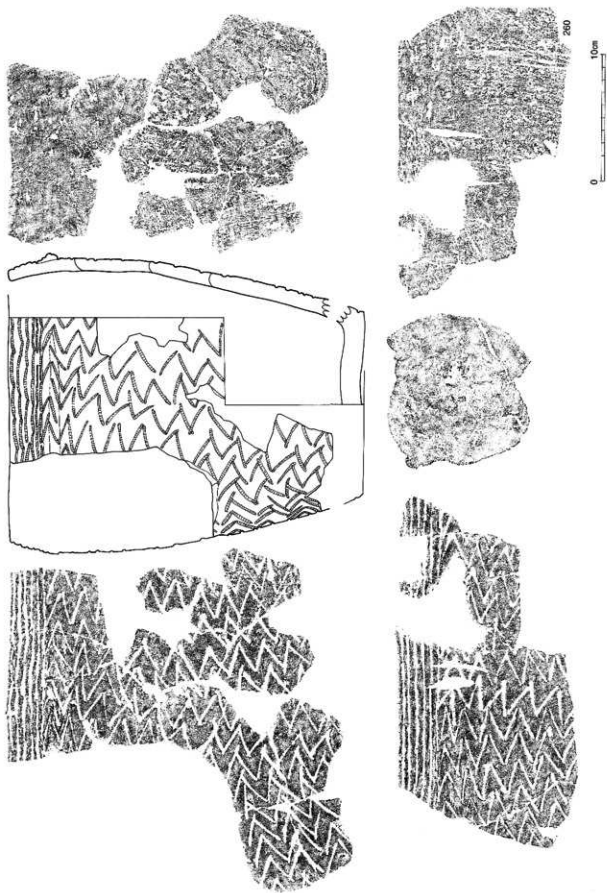
#### V-1 a類土器 (第45圖)

この類は、口縁部から胴部にかけて全面同一施文である。貝殻版縁部により、直線的な条痕を密に施文することで羽状文を呈する。群である。口縁部から胴部にかけて全面的に同一に施文している。いずれも口縁部は直行ないし内弯している。

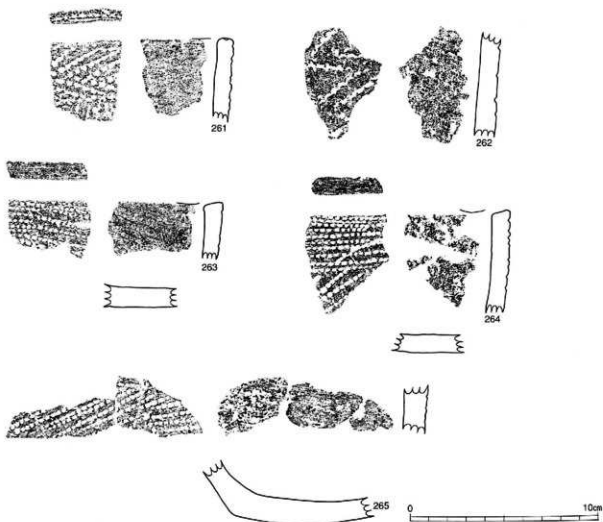
文様については、266・267は貝殻条痕による直線的な羽状文であり、268~270・273は横位及び斜位の条痕である。271には環が極めて多く含まれ、266・268にも比較的多く含まれている。

第10表 Ⅳ類土器観察表 3

採回 番号	遺物 番号	土質	器位	色 調				胎 土				焼成	外 面	内 面	備考
				外	内	石	石	長石	胎土	胎土	胎土				
第 40 圖	232	C-5	Ⅳ	黄 橙 色	黄 色		○	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		
	233	B-6	Ⅳ	赤 色	灰白-黄色		○	○			良	貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		
	234	B-6	Ⅳ	赤 褐色	暗灰黄色		○	○			良	刺突文	ケズリ後ナデ		
	235	B-6	Ⅳ	黄 褐色	灰 白色		○	○			良	刺突文	ケズリ後ナデ		
	236	C-5	Ⅳ	赤 褐色	暗灰黄色		○	○			良	貝殻刺突文・貝殻刺突文	ケズリ後ナデ		
	237	C-7	Ⅳ	黄 褐色	黄 褐色				○	○	ガラス	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	238	C-7	Ⅲ	褐 色	黄 褐色				○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	239	B-6	V	粗 色	灰 黄色		○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	240	B-6	Ⅳ	褐 色	赤 褐色		○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	241	C-6	Ⅳ	粗 色	粗 色				○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
第 41 圖	242	C-5	Ⅳ	褐 色	暗灰黄色				○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	243	C-5	Ⅳ	赤 褐色	赤 褐色				○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	244	B-6	Ⅳ	橙 色	灰黄褐色				○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	245	B-6	Ⅳ	橙 色	灰黄褐色		○	○			ガラス	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	246	C-5	Ⅳ	赤 褐色	黄 灰色		○	○			ガラス	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	247	B-7	Ⅳ	粗 色	暗灰黄色		○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	248	C-6	Ⅳ	浅黄褐色	浅黄褐色				○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	249	C-5	Ⅳ	黄 褐色	黄 褐色				○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	250	B-6	Ⅳ	灰 黄色	灰 黄色				○	○	良	貝殻条痕文	貝殻条痕文		
	251	C-7	V	浅黄褐色	浅黄褐色				○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
第 42 圖	252	B-5	Ⅳ	橙 色	橙 色		○	○			良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	253	B-7	Ⅳ	橙 色	橙 色				○	○	良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ		
	254	D-7	Ⅳ	黄 褐色	暗灰黄色				○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	255	254		橙 色	暗灰黄色				○	○	良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ		
	256	D-8	Ⅳ	黄 褐色	暗灰黄色				○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	257	K-5	Ⅳ	橙 色	橙 色				○	○	良	貝殻条痕文	ケズリ後ナデ		
	258	B-5	V	赤 褐色	暗灰黄色				○	○	良	貝殻条痕文後ナデ	貝殻条痕文		
	259	B-5	Ⅳ	明黄褐色	明黄褐色		○	○			良	貝殻条痕文後ナデ	ケズリ後ナデ		



第43圖 N類土器 1



第44図 IV類土器 2

V-b類土器 (第45・46図)

この類は、口縁部から胴部にかけて全面同一施文である。貝殻腹縁部により、縦位や斜位・横位によるうねりのある条痕や流水状の条痕を押し引く一群である。271・272・274・278がこの類に該当するが、V-a類と明確に分類できない資料も見受けられる。施文が雑で施文間の隙間が大きい。いずれも口縁部は直行ないし内弯し、小礫が多く含まれている。

V-c類土器 (第45図)

この類は、口縁部に文様帯をもっている一群であり、胴部以下は上記aないしb類に似た施文であり、275～277が本類に該当する。

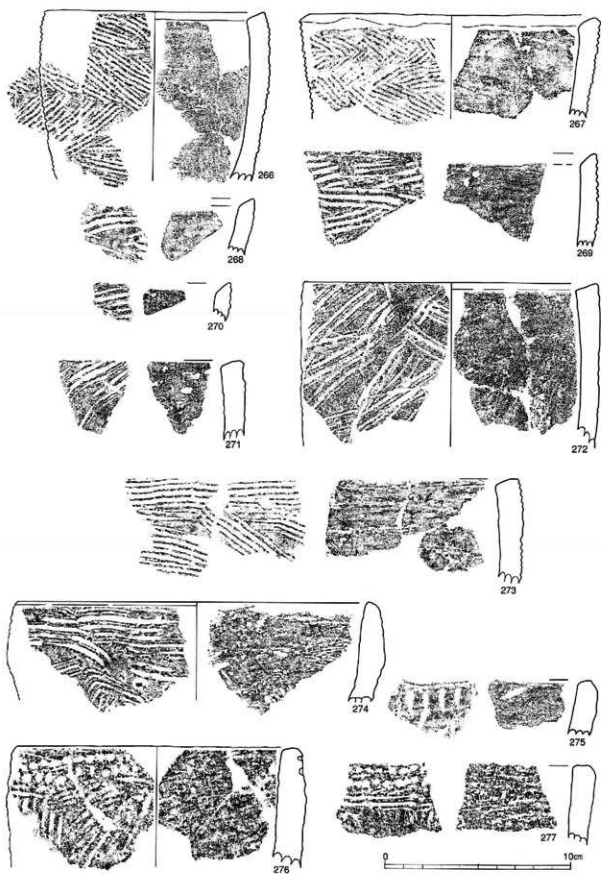
275は口縁部に貝殻腹縁部による1cm程度程度の鋸歯状縦位の刺突文を、横方向に連続してめぐらしている。

276と277は、口縁部に斲状工具による2条の列点文を横方向に連続してめぐらしている。276は磨耗が激しく胴部の文様を確認しにくい状況であるが、口縁部の文様帯や器形、口唇部の調整等の類似性から276と277は同一個体とも考えられる。276と277の文様を合一して考えると、刺突列点文下に2～3条の横位の細めの条痕を施し、その下位部分から胴部にかけて横位や斜位の太目の貝殻条痕を施してあると想定される。

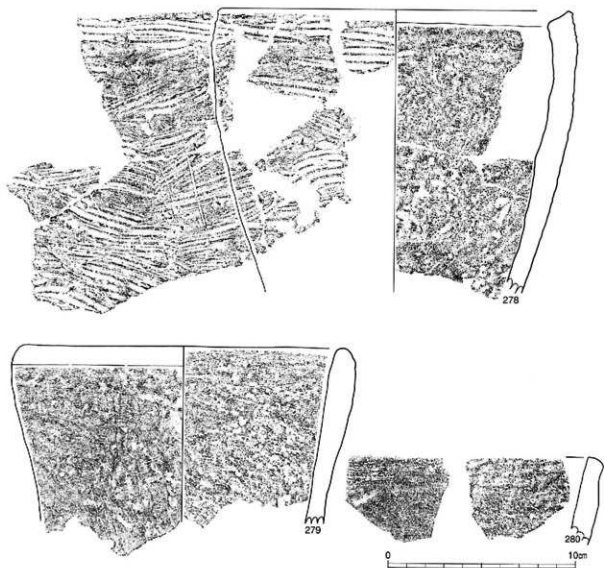
いずれの上器片も、小礫等はあまり含まれない。

V-d類土器 (第46図)

この類は、文様を持たない一群で、279・280が本類に該当する。器形や胎土、調整等の酷似性から本類に分類されたものである。



第45圖 V類土器 1



第46図 V類土器 2

279は口縁部断面が肥厚しているが、280は口唇部直下の指ナデ整形により口縁部上半部の断面が細くなっている。どちらもヘラズリ後の指ナデの器面調整痕が顕著に残され、器面の凹凸が大きい。279には縞が多く含まれる。

281～295は胴部の資料である。大部分が小片であり、残存する部位で観察できる限りにおいてのみ記述する。

281～286はV-a類の胴部である。いずれも細目の条痕により施文され、直線的である。281・283～285は、一定方向に細い条痕が施される結果、条痕が交差せず羽状文を呈しない。282は、右上がりと右下がり

の条痕が資料左側部位で交差しており、羽状文を呈していると思われる。

287～295はV-b類である。いずれもa類土器より太目の条痕により施文され、a類に比して条痕が若干うねりを呈している。287は条痕が大変雑で器面の凹凸も激しく、施文は綾杉文と考えられる。288は、直線的な横位や斜位の5条痕の条痕が菱形を構成する。289・291～294は、緩やかな斜位の条痕が接することにより進入角度が小さい綾杉状を形成する。295はうねりの大きい条痕を流水状に施文し、無施文部も大変広い。